



Title	近江日野商人山中兵右衛門家の出店経営：小田原店を中心に
Author(s)	鈴木，敦子
Citation	大阪大学経済学. 2008, 58(1), p. 41-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/14711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近江日野商人山中兵右衛門家の出店経営

——小田原店を中心に*——

鈴木 敦 子[†]

1 はじめに

近江八幡、日野、五個荘、高島など、琵琶湖周辺を出身とする近江商人は、近江を本拠地とし他国稼ぎをすることで知られる。なかでも日野商人は、楽市の奨励など商業保護に力を注いだ日野城主、蒲生氏郷が、伊勢松坂、会津若松へと転封された際、氏郷を慕い彼に追従し、それらの地で商工業に携わったとされる。日野碗や売葉の行商をする一方で、古着をはじめ上方の商品を関東、東北に持ち下り、奥州の紅花などを仕入れて上方でさばく、いわゆる産物廻しのこぎり商法と呼ばれる商業活動を展開した¹。元禄期には日野大當番仲間の商人組織を形成するに至り、商業活動における相互扶助と幕府による保護政策を活用し、また、日野商人定宿を各街道に置いて、行商の安全と販路拡大の礎を築いた。やがて頻繁に持ち下る商品の中

継所を関東に置いて一軒の店を構えるようになると、そこを拠点として徐々に商域を広げ、酒造および醤油醸造業を営む商人を多く輩出することとなった²。日野商人の研究といえば、中井源左衛門家の研究があげられるが³、本稿では中井家に次いで規模が大きいと目される山中兵右衛門家を取りあげる。

宝永元年（1704）、後に兵右衛門を名乗る二十歳の山中万吉は、日野碗二駄を元手に御殿場地方へ行商の旅に出立した⁴。御殿場は鎌倉往還、足柄街道、箱根道の交差する交通の要所である。兵右衛門は享保3年（1718）に伊勢屋徳兵衛の土地を借り、御殿場にやまかのう本店日野屋を開店した⁵。これが山中兵右衛門家の創業であ

* 本稿を執筆するにあたり賀川隆行先生、阿部武司先生から多大なご教示とご指導を賜りました。日野商人山中兵右衛門家文書研究会では松元宏、宇佐美英機、筒井正夫、青柳周一、佐々木哲也の諸先生方、樽林一美、久岡道武、山口悠の皆様より貴重なご助言を頂戴しました。大阪大学経済史・経営史研究会では沢井実、友部謙一、鳩澤歩、中林真幸、神田さやこの諸先生方、高槻泰郎、結城武延の皆様から有益なコメントを頂戴しました。日野町史編さん室、御殿場市立図書館では山中兵右衛門家文書の閲覧利用にあたり大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

[†] 大阪大学大学院経済学研究科資料室助手
e-mail: suzuki@econ.osaka-u.ac.jp

¹ 日野商人および近江商人研究については『近江日野町志』（1930）、菅野和太郎（1941）、江頭恒治（1959）他多くの研究がある。近年の近江商人研究については上村雅洋（2000）参照。

² たとえば行田に本店をおく鈴木忠右衛門家は、熊谷、忍領長野、上州境、久喜、羽生、古河に店を持った。野田六左衛門家は安中の板鼻本店の他に、倉賀野河岸、高崎に店舗を持った。関東で酒造業、醤油醸造業を営んだ日野商人の事例については、賀川隆行（2006）を参照。宇佐美英機（2006a）は五個荘商人や八幡商人と異なる日野商人の特徴として、製造業の開業をあげている。

³ 小倉栄一郎（1962）、江頭恒治（1965）、宇佐美英機（2003）など参照。他に主な日野商人の研究として正野玄三家の研究がある。近世期に関しては上村雅洋（2004）、本村希代（2004）など参照。

⁴ 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上（1976）、17頁。

⁵ 山中家において御殿場分店も出店の一つに数えられるが、本稿では御殿場地方の最初の経営拠点とした分店とそれ以外の店を区別するため、分店を「本店」、それ以外の四店を便宜的に総称して「出店」とよぶことにする。なお、嘉永2年「家政取極之控」（近江日野商人館所蔵）などでは、「本店」以外の店は「外店」と称されている。本店の「店勘定細見帳」は帳簿様式の点からみても出店とは異質であり、両者を区別することは経営実態の面からみても有効と思われる。本店と出店の経営動向比較については今後の研究課題とする。

る。その後、御殿場に^{まるやま}⑪店、小田原池上に^{まるだい}⑫店、伊豆南条に^{まるふと}⑬店、沼津上土に^{いちかのう}⑭店と出店を構え、本店含め五店舗体制を築いて御殿場地方の一大商家に成長する⁶。

近世から近代に至るまでの山中家の歴史的概略を扱う先行研究に、松元宏および佐々木哲也の論考がある。松元は、初代兵右衛門の創業から昭和期に至るまでの山中家の歴史を、御殿場地方における社会経済情勢の変化を踏まえながら論じた⁷。佐々木哲也は各出店の開設経緯を詳らかにし、本家および出店の帳簿類の現存状況を紹介している⁸。

近世期における山中家の経営について論じた先行研究として、まず、末永國紀の研究があげられる⁹。末永は本家主人、本店支配人による家政改革に着目し、所有と経営の観点を含めてこれを検討した。一方、青柳周一は、主法金とよばれる報奨金支給制度の導入を、文久期の山中家における家政改革から明らかにした¹⁰。賀川隆行は本家と本店の資産内容の変化を検討し、本家における糸の仕入れと売却、益金上納、損失補填などを詳細に論じた¹¹。宇佐美英機は奉公人請状の分析を通じ、奉公人の入店年齢の幅の広さや、蒲生郡域よりも甲賀郡出身者が多いといった特徴を指摘した¹²。

このように山中家の経営動向を扱う先行研究

は、日野本家および御殿場 併 本店を対象としてきた。しかしながら、山中家全体の経営実態を明らかにするためには、本店以外の出店経営の解明が不可欠である。なぜなら、日野商人の特徴は、主人は日野の本家に住み、手代は関東をはじめとする遠隔地で店舗経営を担い、且つ、多店舗経営を展開する点にあるからである。山中家の研究においても、日野本家、御殿場本店、その他の出店について、それぞれの経営を営み、有機的に連携していたかを再現し、提示することが目指されるべきであり、そのことによって日野商人山中兵右衛門家の全貌も明らかになる。つまり、本家、本店のみならず、出店についても子細な検討が必要なのである。そのためのアプローチは、第一に本家、本店、出店、それぞれ個々の経営体としての活動の内実、第二にそれらの共時的な相互の連携、第三にその連携の通時的な変化と発展を明らかにすることである。

本稿では、山中家全体の経営実態を明らかにするための端緒として、出店の経営活動に照明を当てる¹³。まず各出店の沿革を踏まえ、その経営動向を把握するため、資本蓄積や収益の変化を概観し、仕入れや販売商品の特質を分析する。そのうえで上述の分析を小田原店に焦点を絞り、より詳細な検討を加える。作業手順としては、第一に小田原店の経営実態を明らかにするため、同店の決算帳簿である「小田原店細見勘定帳」の記載様式を把握し、次にその帳簿構成の特徴を抽出する。第二に小田原店の経営動向を探るため、まず、仕入れ、醸造、販売の推移をみる。次に、特に主力商品である酒および醤油に主眼をおき、それらの販売の推移と収支の趨勢を検討する。第三に小田原店と本家、本店とのあいだの資金の流れを検討する。そのためにも、小田原店の資産負債勘定の推移を確認する。次に、資産負債勘定に記載される元手

⁶ 近世期に事業の礎を築いた山中家は明治後期に大きな飛躍を遂げるが、御殿場地方において、山中家の経済規模が他を圧倒していることを、筒井正夫は御殿場帳戸数割等級から指摘している（以下、筒井正夫（2006）、表1、27頁より抜粋）。

	本店等級	課税額	御殿場酒店等級	課税額
明治24年	1等	8.00円	8等	1.00円
明治45年	特1	54.65円	1等	9.00円

（原拠「御厨町町会議書」）

⁷ 松元宏（2006a）。なお、明治19年2月改めの本店勘定帳を紹介したものに松元宏（2006b）がある。

⁸ 佐々木哲也（2003）、（2006）。

⁹ 末永國紀（1997）。

¹⁰ 青柳周一（2006b）。

¹¹ 賀川隆行（2005）。

¹² 宇佐美英機（2006b）。明治期に関しては宇佐美英機（2007）参照。

¹³ 本稿では各店舗を便宜的に地名を付して表記することにし、必要に応じて店印を補う。

金、株金、利息、益金に焦点を絞り、小田原店と本家、本店との資金面の関係について検討する。このことにより、小田原店の位置づけを確認すると共に、出店機能の一端を捉える。

山中家文書は近江日野商人館に約7千点、御殿場市立図書館に約3千点が所蔵されている¹⁴。経営史料としては、本店および出店においてそれぞれ作成された「勘定細見帳」という決算帳簿がある。そこで本稿では、各店舗の「勘定細見帳」を主たる対象史料とする。近世期から明治初期における、各出店の「勘定細見帳」から決算状況を確認できる期間は、御殿場酒店が天保8年(1837)下期から明治5年(1872)上期、小田原店が天保4年下期から明治5年上期、伊豆店が天保7年から明治4年、沼津店が嘉永5年(1852)から明治4年までである。小田原店は御殿場酒店に次いで開店した店であるが、出店四店舗のなかで最も長期的な追跡が可能である。本稿で小田原店を詳細に扱うのはその理由による。

以上のように、山中家の出店、特に小田原店の「勘定細見帳」を分析することにより、山中家における経営活動の全容を明らかにする端緒としたい。

2 全出店の沿革と主要商品の仕入れ・販売

全出店の販売品および事業内容の検討にはいるまえに、まず、各店舗の創業および加入の経緯を概観しておく。尙本店が御殿場が開業して82年後の寛政12年(1800)に、御殿場村名主平右衛門から酒株などを譲り受け、酒造業を開始した店が御殿場酒店である。^⑩店と称する。小田原店は[㊥]店と称するが、その前身は^{かくなか}店[㊤]で、文化8年(1811)に相州関本村の伝蔵が所持する酒株99石を本店支配人が15年季で借り受け、翌文化9年に関本村に開設された。

[㊤]店は文政2年(1819)に閉鎖され、小田原城下により近い池上村に移転し[㊥]店として酒および醤油の醸造業を営んだ。伊豆店は元来、山中家の分家である山中与兵衛が南条村で醤油醸造を行っていた店であったが、経営困難から天保7年に本家、兵右衛門に譲渡された。[㊥]店と称する。沼津店も分家与兵衛の店で^{かきかのう}店[㊦]と称していたが、与兵衛から本家が買い取り、嘉永4年に[㊦]と改称して酒類販売業を開始した¹⁵。以上が各店の沿革の概略であるが、その他、委細がわかる場合は出店ごとの論述内で触れることとする。

これら四店舗の経営実態を明らかにする手続きとして、以下ではまず第一に各店舗の販売品を抽出し、商品群の傾向を示したうえで、主要な原料や商品の買高および売高から、各店舗の主たる営業品目を確認する。第二に各店舗の経営活動を個別検討していく。更に各店舗の資産負債勘定、収益費用勘定の変化を概観し、仕入れや販売商品の特徴を分析する。なお、取引先がわかる場合や、出店間での商品流通がみられる場合はそれを示すことにする。

(1) 出店の販売品および事業内容

天保4年下期から明治5年上期のあいだで確認できる、各店舗それぞれの「勘定細見帳」の売高から販売品を抽出したのが表1. 出店販売品である。

全店に共通する主な販売品は、酒、醤油、酢、米、大豆、塩などで、醸造品や穀類、原料品が中心であることがわかる。しかし、伊豆店、沼津店では、本家に譲渡される以前より、醸造品や穀類のみならず、日用品類を含む多様な商品を扱っている。たとえば、伊豆店では太物などが、沼津[㊦]店では炭、灰などが販売されている。山中本家に引き取られてからは、伊豆店では炭、鉄、古着などが、沼津[㊦]店では

¹⁴ 近江日野商人館所蔵の近世山中家の文書については青柳周一(2006a)を参照。

¹⁵ 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上(1976)、62頁。

表 1. 出店販売品

	小田原店 ㊤	御殿場酒店 ㊦	伊 豆 店		沼 津 店	
			㊤ (譲渡前)	㊤ (譲渡後)	㊤ (譲渡前)	㊤ (譲渡後)
酒	○	○	○	○	○	○
焼酎	○	○				
諸白					○	○
(諸白) 崩						○
醤油	○	○	○	○	○	○
醤油諸味		○				
味醂	○	○		○		○
米	○	○	○	○	○	○
切手米	○					
作米	○					
蔵米		○				
内米		○				
糯米		○				
白米		○				
小麦	○		○	○		○
大麦	○	○	○	○		○
大豆	○	○	○	○	○	○
小豆	○			○	○	○
裸麦	○					
稗麦	○					
春麦	○	○				
蕎麦	○	○				
大角豆	○					
たばこ	○			○		
稗	○					
干粕	○			○	○	○
生粕		○				
粉糠	○	○	○		○	
桃塩	○	○	○	○	○	○
菜種	○					
麦	○					○
すま (ふすま・麴)	○					
麦安	○					
種	○					
遠藤	○					
酢	○	○	○	○	○	○
水油 (油)				○	○	○
粕		○	○	○	○	○
味醂粕						○
下り粕					○	
油粕	○					
炭				○	○	
鉄				○		
味噌			○	○	○	○
成薬				○		
古釜				○		
灰					○	○
桃種					○	
素麵			○		○	
太物			○			
綿実						○
種水						○
蠟燭				○		○
干鰯						○
感應丸						○
萬應丸						○
繰綿						○
成茶				○		
砂糖				○		
粉				○		
青蓮				○		
琉久				○		
傘				○		
前挽				○		
砥石				○		
松魚						○
貝子				○		
量糸						○
切				○		

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場酒店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

干鰯、薬（感應丸、萬應丸）などが販売されている。このような商品の幅広い取扱いは、多種商品販売を営む本店と共通する¹⁶。販売品の点から出店四店を大別すれば、主として醸造品や原材料品を扱う小田原店や御殿場酒店と、それ以外の日用品類をも含む伊豆店や沼津店とによって構成されていることがわかる。

次に、各店舗の「勘定細見帳」より、これら出店における原料や商品の主要なものを買高について抽出したのが〈表2．出店買高〉であり、同様に売高について抽出したのが〈表3．出店売高〉である。

酒造には米が、醤油醸造には大豆が必需原料であるが、酒や醤油をどの店舗でも醸造していたわけではないことが〈表2〉〈表3〉からわかる。たとえば、御殿場酒店や沼津店では一貫して売高に醤油が記載されているが、醤油醸造に必要な小麦の仕入れがない。よって、両店で醤油醸造が行われていたとは考えられない。御殿場酒店では小田原店や伊豆店から買入れた醤油を販売しており、仕入れた大豆は醤油原料としてではなく、商品として販売していたとみられる。

酒の売高では沼津店が最も多い年が頻繁にみられるが、米の仕入れが小田原店、御殿場酒店に比して少ないことから、小田原店、御殿場酒店のように自店舗で醸造するというより、仕入れた酒を販売していたと考えられる。

以上のように、主たる原料および商品の売高および買高から四店を概観すれば、小田原店は酒および醤油の醸造、御殿場酒店は酒造、沼津店は酒の販売、伊豆店は醤油醸造を中心に経営がなされていたことがわかる。以下では各店舗

ごとに、それぞれの経営動向を更に詳細に検討する。

（2）各出店の経営動向

①御殿場⑪酒店

日野屋忠助（三代目兵右衛門）は寛政12年に、御殿場村名主平右衛門から酒株24石を、板蔵、諸道具、林一カ所を含め200両で譲り受け、店や酒蔵の普請に着手し、酒造業を開始した¹⁷。これが⑪店である。当初30年季での譲渡であったが、天保11年には永代譲渡となっている¹⁸。「御殿場酒店勘定細見帳」は、小田原店のそれと同様、秋（上期）と春（下期）の年二回決算である。

御殿場酒店は酒、焼酎の醸造および製造を行っており、酒、焼酎、醤油、酢、塩の販売を主としている。酒は天保から弘化期において平均すると約780石、嘉永から万延期において約820石、文久期以降は約670石醸造している。

〈図1．小田原店と御殿場酒店の酒造高〉は同じく酒造業を営む小田原店の醸造高と比較したものである。天保から弘化期において御殿場酒店は小田原店より平均して約2.4倍、嘉永から万延期において約1.6倍、文久期以降は約1.9倍の酒を生産している。よって、山中家において酒造業主力店の筆頭は御殿場酒店であることが確認できる。

酒以外に他の店に比して御殿場酒店で特に取扱いが目立つのは塩の販売である。塩は大豆や小麦と同様、醤油醸造に欠かせない原料であるが、御殿場酒店では醤油の醸造は行っていない。しかしながら、小田原店より塩の買高、売高ともに多い。「御殿場酒店勘定細見帳」の金

¹⁶ 併 本店の決算簿である「店勘定細見帳」から、四店の出店が揃った嘉永元年の資産内容をみると、「海上諸国物」の部では、わらび粉、布のり、ひじき、扇子、打物入、小割鉄、太物、白粉、鏡入、染木綿、丸のへ鉄、甲州糸などがある。他に資産内容は、蔵五カ所の有高、店現金、くり綿、米・大豆、小豆、売掛金などによって構成されている。

¹⁷ 寛政12年12月「酒株証文之事」（近江日野商人館所蔵）。なお、200両のうち42両が平右衛門の無尽借金金の肩代わりであったことから、御殿場村名主家と新興商人の勢力交代の指摘がある（『御殿場市史』8通史編上（1981）、308頁）。

¹⁸ 天保11年8月「永代譲り申酒株之事」（近江日野商人館所蔵）。

表 2. 出店買高

会計年 期	米					酒				
	小田原店		御殿場酒店		伊豆店	沼津店	小田原店			
	俵 斗 升 合		御殿場酒店買入	本店買入	俵 斗 升 合	俵 斗 升	俵	駄 石 斗 升 合	方々より買入	
天保 4 年 下	584 3 6 0							22 2 2 0	酒々より買入	
天保 5 年 上									酒方々下り色々買入	
天保 5 年 下	1,323 1 8 0								酒焼酎買入	
天保 6 年 上	1,580 3 8 6	古米新米							酒方々買入	
天保 6 年 下	1,233 2 0 0								酒焼酎買入	
天保 7 年 上	1,348 3 0 0								酒焼酎買入	
天保 7 年 下	267 3 1 7							1 樽	下り酒	
天保 8 年 上	1,005 0 0 0								正中酒買入	
天保 8 年 下			1,643 6 0 6	512 3 2 0					酒焼酎買入	
天保 9 年 上	2,202 1 4 0		1,925 1 6 6	680 3 2 0					酒焼酎買入	
天保 9 年 下	1,495 1 0 0		626 1 5 5	177 3 4 0				4 3 1 1	酒焼酎買入	
天保 10 年 上	2,115 3 5 0	切手共入テ	947 1 5 5	177 3 4 0				103 4 3 1 1	酒焼酎買入	
天保 10 年 下	534 0 0 0		1,259 0 0 0	147 0 0 0				6 0 0 0 0	下り酒	
天保 11 年 上	1,653 0 0 0	米切手共ニ	1,779 0 0 0	149 0 0 0				143.5 0 0 0 0	下り酒	
天保 11 年 下	2,073 0 4 5	米切手作米もチ米	2,123 0 0 0	25 9 0 0				99 0 0 0 0	下り酒	
天保 12 年 上	1,634 0 8 0	米切手共	2,233 0 0 0	25 3 6 0				81.5 0 0 0 0	下り酒	
天保 12 年 下	1,018 2 8 0	蔵米作米共	2,154 0 0 0	55 0 0 0				24 0 0 0 0	下り酒	
天保 13 年 上	2,663 0 4 5	米切手共ニ	2,542 0 4 0	55 0 0 0				230.5 0 1 0 0	下り酒	
天保 13 年 下	1,046 3 9 5	御切手作餅米取合	862 0 0 0	332 1 7 0				59.5 0 0 0 0	下り酒	
天保 14 年 上	2,636 0 0 0	米切手共ニ	1,412 0 0 0	356 1 7 0				184 0 0 0 0	下り酒	
天保 14 年 下	2,197 1 2 0	切手作米餅米共	1,785 2 5 0	153 2 0 0				46 0 0 0 0	下り酒	
弘化元年 上	2,974 2 2 0	米切手共	2,408 2 5 0	153 2 0 0				145.5 28 2 6 3	酒品々	
弘化元年 下	2,676.5 0 0 0		1,823 0 0 0	96 0 0 0				60.5 0 0 0 0	下り酒	
弘化 2 年 上	3,640 2 0 0		1,823 0 0 0	96 0 0 0				55 19 6 6 1	下り酒	
弘化 2 年 下	2,191 1 0 0	米切手餅共	2,481 0 0 0	47 3 0 0			(832)	131 1 0 3 3	下り酒	
弘化 3 年 上	3,448 2 0 0		2,686 0 0 0	44 3 0 0			(439俵4分6厘)	235.5 17 6 3 3	下り酒	
弘化 3 年 下	2,378 3 3 7	米餅共	2,013 0 0 0	57 8 0 0			(947表2斗)	90.5 0 0 0 0	下り酒	
弘化 4 年 上	2,605 3 3 7		2,542 0 0 0	59 8 0 0			(556)	123.5 0 0 0 0	下り酒	
弘化 4 年 下	3,260 3 4 0	米餅共	1,299 0 0 0	192 2 2 0			(683)	109.5 0 0 0 0	下り酒	
嘉永元年 上	4,935 1 4 0		2,263 0 0 0	192 2 2 0				208.5 26 2 0 0	下り酒	
嘉永元年 下	1,757 0 5 7		1,696 0 0 0	413 0 0 0				63 0 0 0 0	下り酒	
嘉永 2 年 上	3,518 0 5 5		2,134 0 0 0	413 0 0 0				165 23 3 0 0	下り酒	
嘉永 2 年 下	2,566 3 0 5		1,561 0 9 7	631 2 3 3				酒4■駄味餅共並酒8石1斗	下り酒	
嘉永 3 年 上	2,676 3 4 5		1,736 0 9 7	633 2 3 3				115 5 0 0 0	下り酒	
嘉永 3 年 下			1,134 0 0 0	342 0 0 0					下り酒	
嘉永 4 年 上	2,985 0 0 0		1,331 0 0 0	344 3 0 5				136.5 0 0 0 0	下り酒	
嘉永 4 年 下	1,000 0 7 5		1,228 0 0 0	1,201 1 4 0				59 0 0 0 0	下り酒	
嘉永 5 年 上	1,543 4 0 0		1,409 0 0 0	1,201 1 4 0	1,032 3 4		50	165.5 2 1 0 0	下り酒	
嘉永 5 年 下	2,911 0 4 0		1,428 0 9 0	607 1 2 0				121 0 0 0 0	下り酒	
嘉永 6 年 上	3,448 1 4 0		1,713 0 6 0	609 1 2 0	1,532 1 1		131	183 0 0 0 0	下り酒	
嘉永 6 年 下	3,016 3 2 0		261 0 0 0	2,077 9 2 5				114.5 0 2 2 0	下り酒	
安政元年 上	3,880 0 0 0		581 0 0 0	2,083 5 2 0			1,403	228 9 5 0 0	下り酒	
安政元年 下	2,288 0 5 5		441 0 0 0	2,094 0 0 0				146.5 0 0 0 0	下り酒	
安政 2 年 上	2,941 2 0 5		638 0 0 0	2,094 0 0 0				276 0 0 0 0	下り酒	
安政 2 年 下	2,398 2 1 0		752 2 7 0	2,034 0 0 0				123.5 0 0 0 0	下り酒	
安政 3 年 上	3,518 2 1 0		752 2 7 0	2,035 0 0 0			49	226.5 0 0 0 0	下り酒	
安政 3 年 下	1,490 2 6 8		970 0 0 0	1,696 6 8 0				72 0 0 0 0	下り酒	
安政 4 年 上	2,093 2 6 8		1,194 1 5 0	1,696 6 8 0			92	161 0 2 0 0	下り酒	
安政 4 年 下	2,232 2 8 0		624 0 0 0	1,966 2 5 0				97.5 0 0 0 0	下り酒	
安政 5 年 上	2,984 2 8 0		633 3 5 3	1,966 2 5 0			165	175 0 0 0 0	下り酒	
安政 5 年 下	1,031 0 5 0		1,152 0 0 0	826 0 0 0				44 0 0 0 0	下り酒	
安政 6 年 上	1,412 3 0 0		1,152 3 2 0	826 0 0 0			40	97.5 0 2 1 0	下り酒	
安政 6 年 下	1,682 2 6 0							114.5 0 0 0 0	下り酒	
万延元年 上	2,914.5 0 0 0		661 0 0 0	1,696 3 5 0			109	149.5 0 0 0 0	下り酒	
万延元年 下	1,661 2 7 0		1,051 0 3 5	1,326 1 6 0				198 0 0 0 0	下り酒	
文久元年 上							49		下り酒	
文久元年 下	1,822 2 1 5		408 3 3 8	1,694 1 7 5				99.5 0 0 0 0	下り酒	
文久 2 年 上	1,949 2 1 5		1,008 3 4 0	1,694 1 7 0			184	221 5 0 0 0	下り酒	
文久 2 年 下	1,475 3 7 5		1,213 0 0 0	1,414 1 7 5				80.5 0 0 0 0	下り酒	
文久 3 年 上	1,532 9 3 0		1,213 0 0 0	1,414 0 0 0			234	140 0 0 0 0	下り酒	
文久 3 年 下	1,586 0 0 0		731 0 0 0	731 0 0 0				199 0 0 0 0	下り酒	
元治元年 上							61		下り酒	
元治元年 下	1,675 0 0 0		1,000 0 0 0	1,737 2 5 0				101.5 0 0 0 0	下り酒	
慶応元年 上	2,038 0 0 0		1,000 0 0 0	1,737 2 5 0				213.5 0 0 0 0	下り酒	
慶応元年 下	1,108 0 0 0		1,087 9 2 0	567 2 7 0				148.5 0 0 0 0	下り酒	
慶応 2 年 上	1,225 2 5 0		1,087 9 2 0	567 2 7 0				329 0 0 0 0	下り酒	
慶応 2 年 下	803 0 6 0		586 0 0 0	204 2 0 0			133	190.5 8 4 0 0	下り酒	
慶応 3 年 上	1,514 5 0 0		586 0 0 0	204 2 0 0			645	281 2 6 4	下り酒	
慶応 3 年 下	1,096 0 0 0		850 0 0 0	1,045 0 0 0				27 0 5 9	下り酒	
明治元年 上	1,525 0 0 0		870 0 0 0	1,115 5 0 0			56	236 2 7 8	下り酒	
明治元年 下	1,819 0 4 0		103 0 0 0	1,764 5 0 0			93	137.5 0 0 0 0	下り酒	
明治 2 年 上	1,832 8 0 0	米色々		1,865 5 0 0			333	180 0 0 0 0	下り酒	
明治 2 年 下	868 8 1 0	米糯米共	2 0 0 0	995 1 2 0				85 0 1 0 0	下り酒	
明治 3 年 上	1,806 3 9 8	米取合		999 1 8 5			45	96 0 1 0 0	下り酒	
明治 3 年 下	1,292 6 5 0	米糯米共		1,818 9 2 4.5				40 0 0 0 0	下り酒	
明治 4 年 上	1,633 0 0 0	米取合		1,868 9 2 4			245	40 0 0 0 0	下り酒	
明治 4 年 下	1,500 0 0 0	米取合		2,450 7 7 0				82.5 0 0 0 0	下り酒	
明治 5 年 上	1,533 0 0 0	米取合		2,450 7 7 0				215 0 0 0 0	下り酒	

(出所) 天保 5 年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) —は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。()は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。■は虫損を示す。

表 2. 出店買高 (続)

会計年 期	大豆				小麦				塩	
	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店
天保4年 下	俵 斗 升 合	俵 斗 升 合	斗 升	俵	俵 斗 升 合	俵	俵 斗 升	俵	俵	俵
天保5年 上	244 1 9 0	—	—	—	176 0 0 0	—	—	—	齊田80	赤穂266
天保5年 下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保6年 上	361 0 0 0	—	—	—	174 1 2 0	—	—	—	460	—
天保6年 下	448 0 0 0	—	—	—	333 1 1 5	—	—	—	607	—
天保7年 上	208 0 0 0	—	—	—	143 1 0 0	—	—	—	赤穂315	—
天保7年 下	482 1 1 0	—	—	—	317 0 3 0	—	—	—	708	—
天保8年 上	117 0 0 0	—	—	—	96 2 0 0	—	—	—	才田86	—
天保8年 下	288 3 8 0	—	—	—	131 3 6 0	—	—	—	543	—
天保9年 上	—	14 5 2 5	—	—	—	—	—	—	—	753 町
天保9年 下	872 1 3 0	17 4 1 2	—	—	502 0 1 0	—	—	—	1,185	1,987
天保10年 上	379 2 3 5	62 0 5 0	—	—	—	—	—	—	229	345
天保10年 下	373 0 0 0	63 0 5 0	—	—	266 0 0 0	—	—	—	649	1,506 3軒にて
天保11年 上	191 0 2 0	45 0 8 4	—	—	7 0 0 0	—	—	—	赤穂300	788
天保11年 下	586 2 6 0	45 0 8 4	—	—	245 2 0 0	—	—	—	850	1,900 沼津3軒にて
天保12年 上	1,099 0 0 0	13 0 0 0	—	—	138 0 0 0	—	—	—	620	600
天保12年 下	307 1 5 0	13 0 0 0	—	—	315 3 6 0	—	—	—	568	2,094
天保13年 上	14 0 0 0	1.5 0 0 0	—	—	11 0 0 0	—	—	—	分塩8	467 沼津2軒にて
天保13年 下	1,267 0 0 0	12 2 5 7	—	—	365 0 5 0	—	—	—	900	1,583 沼津2軒分
天保14年 上	311 0 0 0	474 0 0 0	—	—	166 0 0 0	—	—	—	赤穂130	159
天保14年 下	685 0 0 0	476 3 0 0	—	—	437 0 0 0	—	—	—	450	1,610 両家にて買入
弘化元年 上	236 0 0 0	727 4 0 5	—	—	43 0 0 0	—	—	—	3,199	525 才田
弘化元年 下	553 0 0 0	727 4 0 5	—	—	311 1 0 0	—	—	—	塩品々3,204	2,147
弘化2年 上	179 1 0 0	12 0 0 0	—	—	178 0 0 0	—	—	—	赤穂100	1,041
弘化2年 下	302 1 0 0	22 1 5 5	—	—	454 1 4 0	—	—	—	赤穂200	4,325
弘化3年 上	297 0 0 0	54 0 0 0	—	(38)	166 0 0 0	—	—	—	赤穂300	1,070 3軒分買入
弘化3年 下	620 3 0 0	56 0 0 0	—	(242)	412 0 0 0	—	—	—	赤穂600	4,531 4軒分
弘化4年 上	274 0 0 0	24 0 0 0	—	(110)	167 0 0 0	—	—	—	赤穂450	—
弘化4年 下	736 0 0 0	24 0 0 0	—	(87)	331 1 0 0	—	—	—	858	2,004
嘉永元年 上	138 0 0 0	73 0 0 0	—	(115)	283 3 0 0	—	—	—	800	581
嘉永元年 下	656 2 0 0	73 0 0 0	—	—	601 2 0 0	—	—	—	1,500	3,148 沼津3軒にて
嘉永2年 上	164 1 5 0	18 0 7 0	—	—	29 3 0 0	—	—	—	234	1,116
嘉永2年 下	727 2 1 0	18 0 7 0	—	—	482 2 0 0	—	—	—	赤穂1,269	2,124 沼津4軒分
嘉永3年 上	770 2 0 0	6 0 0 0	—	—	419 0 2 0	—	—	—	赤穂870	才田50
嘉永3年 下	651 3 0 0	6 2 3 3	—	—	507 2 0 0	—	—	—	1,444	4,845 沼津塩5軒分
嘉永4年 上	—	6 0 0 0	—	—	—	—	—	—	—	—
嘉永4年 下	696 2 0 0	8 0 0 0	—	—	458 0 0 0	—	—	—	950	3,935
嘉永5年 上	720 0 0 0	185 0 0 0	—	—	58 0 0 0	—	—	—	230	465
嘉永5年 下	568 2 0 0	188 0 2 2	488 3	—	494 0 2 0	—	710 1 4	—	1,311	2,877
嘉永6年 上	138 0 0 0	4 0 0 0	—	—	40 0 0 0	—	—	—	赤穂300	159
嘉永6年 下	389 1 9 0	8 0 0 0	784 0	200	278 0 5 0	—	975 2 3	—	800	1,988
安政元年 上	387 3 3 0	14 0 2 2	—	—	297 0 0 0	—	—	—	赤穂200	才田100
安政元年 下	702 3 3 0	14 0 0 0	—	571	755 0 0 0	—	—	—	900	428 方々にて
安政2年 上	409 0 0 0	280 0 5 0	—	—	227 0 0 0	—	—	—	赤穂650	才田100
安政2年 下	643 3 4 0	282 0 5 0	—	—	536 1 0 0	—	—	—	1,250	2,059
安政3年 上	124 0 0 0	130 0 0 0	—	—	110 0 0 0	—	—	—	446	1,334
安政3年 下	378 0 0 0	130 0 0 0	—	104	462 2 1 3	—	—	—	848	3,446
安政4年 上	163.5 0 0 0	325 0 0 0	—	—	78 0 0 0	—	—	—	700	548
安政4年 下	490 2 0 0	325 0 0 0	—	236	462 0 0 0	—	—	100	774	2,983 5軒分買入
安政5年 上	414 0 0 0	154 0 0 0	—	—	305 0 0 0	—	—	—	赤穂302	1,283
安政5年 下	794 0 0 0	154 0 0 0	—	756	540 0 0 0	—	—	—	952	4,322
安政6年 上	86 0 0 0	45 0 0 0	—	—	6 0 0 0	—	—	—	赤穂557	1,183 4軒分買入
安政6年 下	439 0 0 0	45 0 0 0	—	700	259 0 0 0	—	—	40	赤穂807	2,073
万延元年 上	113 0 0 0	—	—	—	41 0 0 0	—	—	—	才田11	—
万延元年 下	608 1 0 0	14 0 0 0	—	14	172 0 0 0	—	—	—	赤穂才田塩買入	3,506
文久元年 上	78 0 0 0	4 0 0 0	—	—	18 0 0 0	—	—	—	赤穂300	833 3軒買入分
文久元年 下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
文久2年 上	100 0 0 0	77 0 0 0	—	—	15 3 0 0	—	—	—	赤穂200	分塩300
文久2年 下	220 0 0 0	78 0 0 0	—	422	464 3 0 0	—	—	—	赤穂300	570 5軒分買入
文久3年 上	346 0 0 0	218 0 0 0	—	—	51 0 0 0	—	—	—	赤穂450	才田456
文久3年 下	353.5 0 0 0	218 0 0 0	—	160	214 0 0 0	—	—	—	1,574	1,036 4軒買入
元治元年 上	359 2 6 0	8 0 0 0	—	—	149 0 0 0	—	—	—	赤穂250	2,271
元治元年 下	—	—	—	150	—	—	—	—	650	601
慶応元年 上	60 0 0 0	6 0 0 0	—	—	15 0 0 0	—	—	—	赤穂齊田860	91
慶応元年 下	203 1 0 0	8 0 0 0	—	—	244 0 0 0	—	—	—	1,260	709
慶応2年 上	177 0 0 0	16 0 0 0	—	—	21 0 0 0	—	—	—	赤穂100	482
慶応2年 下	542 0 0 0	16 0 0 0	—	—	450.5 0 0 0	—	—	—	930	701
慶応3年 上	266 0 0 0	118 0 0 0	—	—	32 0 0 0	—	—	—	503	737
慶応3年 下	471 0 0 0	—	—	619	351 0 0 0	—	—	—	903	888
明治元年 上	184 0 0 0	287 0 0 0	—	—	6 0 0 0	—	—	—	600	803
明治元年 下	188 0 0 0	287 0 0 0	—	252	8 0 0 0	—	—	—	齊田600	1,116
明治2年 上	75 0 0 0	4 0 0 0	—	258	—	—	—	—	120	760
明治2年 下	178 0 0 0	4 0 0 0	—	88	145 0 0 0	—	—	—	170	1,512
明治3年 上	108 0 0 0	相州大豆20 0 0 0	—	—	56 0 0 0	—	—	—	550	352
明治3年 下	137 0 0 0	20 0 0 0	—	—	176 0 0 0	—	—	—	1,380	515
明治4年 上	318 0 0 0	8 0 0 0	—	—	15 0 0 0	—	—	—	510	1,713
明治4年 下	370 0 0 0	8 0 0 0	—	170	415 0 0 0	—	—	—	1,000	9,242
明治5年 上	349 0 0 0	5 0 0 0	—	—	1 0 0 0	—	—	—	752	105
明治5年 下	375 2 0 0	5 0 0 0	—	—	78 0 0 0	98	—	—	902	724

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

		酢				味噌			
伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店
俵	俵	樽		樽	樽	駄		樽	小樽
		12							
		20							
		57							
		54							
		5							
		35							
		52	6.5駄 町						
		21 9斗7升							
		56 9斗7升							
		30				1 樽			
		88	㊦・町			3			
		67				2			
		84 1斗3升				2			
		22	15樽 山長殿・㊦						
		133	22樽 山長殿・㊦			10.5			
		39				2			
		97				7.5			
		92	120樽 町			1.5			
		141	30樽			5			
		74				1			
		139				4.5			
	(1,205)	68			(192)	3			
	(1,940)	140			(大樽406 生酢14俵5合)	8.5			
	(1,470)	68			(371)	2			
	(966)	177			(508)	6			
	(917)	71			(281)	13.5			
		208				33.5			
		54				3			
		213				12.5			
		66				味噌共並酒8石1斗			
		188				4.5			
		155	8樽		411	8.5			
赤穂 900 分塩1,600	150	70				0.5			
		217		64	697	7		61.5	
		123				2.5			
大1,093 小1,450	402	233		53	467	8.5		53.5	
		99				3.5			
	1,059	229			569	10			
		73				2			
		185			546	8.5			173
		49				2			
		163			532	12			
		47				2.5			
		133			641				
		52				18 樽			
1,580 赤穂塩280		149			610	18.5			
		38				3			
分塩1,800		144			583	8			
		55				3			
	988	82 10本入117樽			745	7.5 1斗	8升入り21樽		182
		41 6ツ				2.5			
	30				258				47
		60				1			
	100	157	12石9斗6升3合		460				170
		44				2			
	560	127 6斗			739	9			75
		94				5			
	1,838				377				
		91 6樽				20.5			
	120	180 小樽6			303	10.5			
		60				2.5			
	1,010	133			81	5.5			38
		大樽46 小樽180				8 樽			
	360	大樽68 小樽180			60	15 樽			9駄小樽5
		20				2			
	1,562	60	26石6斗9升3合			70.5			8.5
	1,965	24			17	1.5			12.5駄
	2,791	32			852 勘	4.5			21駄
		4				3.5			
		21			2,005	5			14.5駄小樽64
	1,250	49	62石7斗 勘			1.5			
		20	3石		1,870	3			28.5駄小樽22
		20	12石			4.5			
						4.5			

(註) ——は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。()は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。

表 3. 出店売高

会計年 期	米				酒				
	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店
	俵 斗 升 合	俵	俵 斗 升 合	俵	石 斗 升 合	石 斗 升 合	樽/駄	(諸白)駄 石 斗 升 合	石 斗 升 合
天保4年 下					146 0 0 0				165 0 4 2
天保5年 上			(111 0 0 0)						
天保5年 下	194 0 0 0				207 4 2 4				206 7 6 2
天保6年 上					398 7 7 1				462 7 7 7
天保6年 下	203 0 0 0				215 1 8 5				215 0 1 0
天保7年 上			1,067 0 0 0		429 0 2 2		諸白13.5駄		511 4 2 6
天保7年 下	37 0 0 0				59 9 3 4				76 7 6 1
天保8年 上			1,042 0 0 0		206 0 0 0		63樽		307 0 3 5
天保8年 下		2				249 1 9 0			
天保9年 上	1,502 0 0 0	6	745 0 0 0		364 4 1 6	656 2 5 3	2.5駄		484 9 4 6
天保9年 下	433 0 0 0				171 9 1 2	197 8 2 0			192 1 8 8
天保10年 上	1,085 0 0 0	2	658 0 0 0		358 1 0 2	547 0 8 5	10樽		477 1 5 0
天保10年 下	94 0 0 0				201 0 3 2	217 5 1 5			201 0 3 8
天保11年 上	842 0 0 0	2	790 2 0 0		404 0 3 9	778 1 8 5	3樽		538 2 9 4
天保11年 下	1,119 3 2 0	2			366 6 8 7	391 4 9 3			309 8 7 6
天保12年 上	1,046 0 0 0	10	838 0 0 0		373 9 6 2	952 5 4 8			453 3 7 8
天保12年 下	249 3 4 0	6			154 4 8 2	503 3 5 3			167 0 4 2
天保13年 上	1,335 3 8 0	8	1,059 0 0 0		527 3 3 6	834 3 7 0			505 1 2 5
天保13年 下	274 0 0 0				205 3 6 1	219 3 1 0			128 0 3 2
天保14年 上	1,313 0 0 0	7	1,420 2 0 2		475 2 7 8	721 5 6 1			346 0 2 2
天保14年 下	1,432 1 2 0	8			359 2 2 1	615 3 2 8			277 2 1 1
弘化元年 上	2,147 0 0 0	11	711 2 0 0		575 9 6 2	1,054 6 8 9			477 8 1 6
弘化元年 下	1,744 3 2 0	3			328 7 2 2	461 9 9 5			272 2 7 0
弘化2年 上	2,462 3 2 0	米もち共14	832 0 0 0		552 8 9 9	1,052 8 4 0			476 0 4 8
弘化2年 下	726 2 0 0	米もち共12		(13)	445 5 0 5	466 7 4 3		(諸白226.5 271 2 8 0)	324 5 2 7
弘化3年 上	1,971 1 0 0	米もち共13	658 3 0 0	(391)	677 3 1 9	1,002 2 3 0		(下)諸白32.5 酒351 7 5 5)	546 3 0 8
弘化3年 下	1,376 3 2 0			(60)	244 3 5 0	288 6 8 1		(諸白239 酒208 4 7 1)	239 9 7 9
弘化4年 上	1,708 3 2 0	7	1,170 0 0 0	(569)	509 0 2 1	797 4 0 1		(諸白459.5 酒267 2 5 2)	465 0 1 6
弘化4年 下	1,539 1 7 0				349 8 0 0	407 5 4 1			274 1 3 7
嘉永元年 上	2,549 0 7 0	白米8	825 5分		678 3 2 6	924 6 2 8			560 3 2 6
嘉永元年 下	1,185 0 0 0				224 5 5 3	344 8 9 1			228 9 2 8
嘉永2年 上	2,486 0 0 0	御蔵米2	1,110 1 3 0		599 9 6 1	873 0 9 4			661 2 5 1
嘉永2年 下	995 0 0 0	2			299 6 9 9	339 0 2 6			334 5 4 7
嘉永3年 上	1,781 0 0 0	3	835 2 3 7		677 0 4 3	1,010 6 9 1			649 0 9 8
嘉永3年 下						176 9 1 8			
嘉永4年 上	1,025 0 0 0		812 2 0 0		675 9 2 4	651 6 5 1	11駄	283 269 0 2 0	651 5 1 4
嘉永4年 下	205 0 0 0				215 0 7 6	256 4 5 2			205 2 5 9
嘉永5年 上	760 0 0 0		910 3 3 0		661 1 2 5	847 3 9 3		627.5 411 6 0 0	577 0 9 2
嘉永5年 下	944 0 0 0	3			417 6 0 2	317 6 0 6			303 1 2 6
嘉永6年 上	1,931 0 0 0	26	872 0 0 0	79	736 0 7 2	818 2 9 8		1,855 0 0 0 0	558 7 9 7
嘉永6年 下	975 2 4 0	2			373 1 7 4	335 8 2 8			276 2 0 3
安政元年 上	2,304 2 4 0	134	1,374 5分	1,321	830 8 9 7	1,015 9 7 9		733 0 0 0 0	639 9 6 9
安政元年 下	135 3 2 0				390 9 5 8	448 1 8 0			274 7 8 8
安政2年 上	829 3 2 0	71	549 5分	58	830 5 7 1	1,071 3 6 3		1,564 0 0 0 0	615 3 7 6
安政2年 下	1,198 0 0 0	9			329 3 6 4	480 3 1 3			252 6 8 3
安政3年 上	1,614 0 0 0	220	500 0 0 0	48	798 9 4 7	1,009 2 5 6		1,079.5 0 0 0 0	584 0 2 9
安政3年 下	190 0 0 0	2			303 4 1 6	451 8 1 4			205 3 4 9
安政4年 上	835 0 0 0	74	496 0 0 0	177	719 1 2 3	1,036 5 7 6			548 3 3 0
安政4年 下	705 3 0 0	蔵米40			249 7 9 2	348 4 6 2		↓以下「酒味酥」として	181 5 6 5
安政5年 上	1,058 3 0 0	405.5	716 2 4 0	89	764 8 6 5	914 8 7 7		1,531.5 650 3 9 2	575 3 2 2
安政5年 下	307 0 0 0				249 7 9 2	257 8 1 7		↓以下「酒味酥」として	181 5 6 5
安政6年 上	565 0 0 0	2	520 0 5 8	34	711 9 1 4	857 2 2 7		1,517 708 6 4 6	433 9 1 2
安政6年 下	390 0 0 0				260 2 5 6			↓以下「諸白味酥」として	165 0 3 6
万延元年 上	959 0 0 0	6	1,229 0 0 0	18	673 3 3 0	957 1 1 2	40樽	1,355 806 9 9 3	389 8 9 8
万延元年 下	585 0 0 0	61			255 8 1 2	273 3 7 8			188 1 9 8
文久元年 上			1,711 0 0 0	40			13樽	1,659 911 6 4 9	249 3 8 2
文久元年 下		51俵1斗5升			359 4 3 6	392 7 9 2			571 5 4 1
文久2年 上	967 0 0 0		449 0 0 0	112	776 2 3 8	969 3 9 9		2,846.5 959 0 3 0	258 0 2 1
文久2年 下	78 0 0 0				277 5 3 1	528 7 7 1		↓以下「諸白」として	497 4 2 0
文久3年 上	150 0 0 0	38	303 0 0 0	28	610 8 3 2	1,000 8 0 5	32樽	3,103.5 1,144 4 6 0	453 3 6 0
文久3年 下	105 0 0 0	72			535 6 6 0	423 1 4 0			
元治元年 上			317 0 0 0	130				1,994 1,130 0 1 2	256 0 8 8
元治元年 下	245 0 0 0				434 0 7 9	453 4 8 4			535 3 1 9
慶応元年 上	416 0 0 0	14	535 0 0 0	12	990 6 1 3	1,095 3 6 8		1,888.5 788 7 9 8	198 0 2 9
慶応元年 下	97 1 5 0				348 3 4 8	474 1 2 7			376 3 1 6
慶応2年 上	230 1 5 0	65	413 0 0 0	33	711 6 0 1	928 7 0 1		1,058.5 576 5 9 2	199 5 4 5
慶応2年 下	205 0 5 0	5			309 2 4 3	272 9 9 9			426 4 1 7
慶応3年 上	771 1 2 0	33	296 0 0 0	133	574 3 2 7	576 4 2 4		914.5 466 7 5 8	171 1 9 3
慶応3年 下	250.5 0 0 0				116 6 3 1	234 1 1 1			433 4 4 7
明治元年 上	711.5 0 0 0	蔵米58 内米3 餅米10	537 0 0 0	163	518 0 5 0	684 7 5 2		619.5 147 4 0 9	189 1 4 1
明治元年 下	424 0 0 0	米251 餅米25		164	274 7 8 4	334 2 3 6		1,163.5 221 3 4 5	348 2 1 3
明治2年 上	883 8 0 0	米254 糯米28	303 0 0 0	220	497 3 4 4	508 5 4 6		1,274.5 444 9 5 1	248 5 6 0
明治2年 下	199俵2石 5 8 0	11			243 7 6 0	224 2 3 8			455 7 0 3
明治3年 上	453 8 8 5	114	23 0 0 0	22	498 0 6 4	519 9 9 0		791 630 1 3 7	228 4 1 9
明治3年 下	198 7 5 0	米5 糯米10			253 4 7 9	393 6 9 8			393 9 9 7
明治4年 上		米128 糯米14	44 0 0 0	2	558 3 1 2	714 6 8 0		1,239.5 690 9 0 3	200 1 8 5
明治4年 下	157 0 0 0	米62 糯米8			353 8 1 9	391 7 2 2			349 0 2 8
明治5年 上	405 3 5 0	米126 白米198 糯米8			807 0 1 8	885 4 4 0			

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

[illegible]

(註) —は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。()は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。

表 3. 出店売高 (続)

会計年 期	小麦				粉糖				酢					
	小田原店	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店
天保4年 下	俵 斗 升	—	俵 斗 升 合	俵	俵	俵	—	—	石 斗 升 合	石 斗 升 合	樽	樽	(船)樽	俵
天保5年 上	—	—	(5 0 0 0)	—	—	—	—	—	—	—	(15)	—	—	—
天保5年 下	55 0 0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保6年 上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保6年 下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保7年 上	—	—	62 0 0 0	—	—	—	—	—	—	—	35	—	—	—
天保7年 下	94 0 0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保8年 上	—	—	85 0 0 0	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—
天保8年 下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
天保9年 上	40 1 6	—	141 0 0 0	—	—	粉糖91.5樽	—	—	—	18 0 0 0	—	—	—	—
天保9年 下	50 0 0	—	—	—	—	糠167.5	—	—	—	42 0 0 0	3	—	—	干粕224.5
天保10年 上	71 0 0	—	—	—	—	粉糖8	—	—	—	21 3 0 0	—	—	—	17
天保10年 下	9 0 0	—	45 0 0 0	—	—	糠61	—	—	—	62 1 0 0	6	—	—	180
天保11年 上	52 3 2	—	206 0 0 0	—	—	糠105	—	—	—	24 0 0 0	—	—	—	—
天保11年 下	100 0 0	—	—	—	—	糠107	—	—	—	■ 6 0 0	9	—	—	255.5
天保12年 上	7 0 0	—	47 0 0 0	—	—	粉糖165	—	—	—	27 4 0 0	—	—	—	49
天保12年 下	4 0 0	—	—	—	—	糠165	—	—	—	79 6 0 0	18	—	—	185
天保13年 上	116 0 0	—	236 0 0 0	—	—	粉糖182	—	—	—	40 5 0 0	—	—	—	395
天保13年 下	142 0 0	—	—	—	—	糠191	—	—	—	72 2 0 0	18	—	—	—
天保14年 上	148 0 0	—	151 1 3 0	—	—	糠40	—	—	—	12 5 0 0	—	—	—	5
天保14年 下	34 0 0	—	—	—	—	糠99	—	—	—	62 4 0 0	38	—	—	262.5
弘化元年 上	91 0 0	—	197 0 0 0	—	—	糠177.5	—	—	—	20樽37石	9	—	—	250
弘化元年 下	76 0 0	—	—	—	—	糠189.5	—	—	—	20樽69石	18	—	—	266
弘化2年 上	85 0 0	—	202 0 0 0	—	—	糠162	—	—	—	25 6 0 0	—	—	—	331
弘化2年 下	69 0 0	—	—	—	—	糠174	—	—	—	60 4 0 0	19	—	—	337
弘化3年 上	167 0 0	—	69 0 0 0	—	—	糠164	(37)	—	—	23 9 0 0	—	(160)	—	336
弘化3年 下	29 0 0	—	—	—	—	糠176	—	—	—	57 3 0 0	22	(395)	—	338
弘化4年 上	37 2 5	—	25 1 9 0	—	—	糠191	(39)	—	—	15 0 0 0	—	(250)	—	35
弘化4年 下	26 0 0	—	—	—	—	糠196	—	—	—	51 5 0 0	22	(551)	—	293
嘉永元年 上	58 3 1	—	4 0 0 0	—	—	粉糖158	—	—	—	18 3 0 0	—	—	—	—
嘉永元年 下	2 0 0	—	—	—	—	糠158	—	—	—	48 3 0 0	36	—	—	241
嘉永2年 上	4 0 0	—	113 0 0 0	—	—	粉糖3	—	—	—	24 0 0 0	—	—	—	—
嘉永2年 下	12 0 0	—	—	—	—	糠165	—	—	—	81 6 0 0	36	—	—	343
嘉永3年 上	—	—	376 0 0 0	—	—	糠44	—	—	—	30 7 0 0	—	—	—	—
嘉永3年 下	—	—	—	—	—	糠187	—	—	—	94 3 0 0	41	—	—	272
嘉永4年 上	12 0 0	—	89 2 2 0	—	—	糠■	—	—	—	29 4 0 0	—	—	—	—
嘉永4年 下	12 0 0	—	—	—	—	糠142	—	—	—	118 4 0 0	50	346	—	251
嘉永5年 上	10 0 0	—	317 1 1 0	—	—	糠140	—	—	—	38 0 0 0	—	—	—	4
嘉永5年 下	106 0 0	—	—	—	—	糠143	—	—	—	150 5 0 0	57	597	—	282.5
嘉永6年 上	144 3 0	—	—	—	—	糠11	—	—	—	40 0 0 0	—	—	—	8
嘉永6年 下	2 0 0	—	—	—	—	糠186	—	—	—	131 5 0 0	54	463	—	222
安政元年 上	140 1 0	—	411 5分	—	—	糠199	—	—	—	49 0 0 0	—	—	—	干粕54
安政元年 下	190 0 0	—	—	—	—	糠199	—	—	—	147 7 5 0	68	541	—	264
安政2年 上	258 0 0	—	56 0 6 9	—	—	糠190	—	—	—	48 9 0 0	—	—	—	30
安政2年 下	6 0 0	—	—	—	—	糠193	—	—	—	129 0 5 0	御酢51	553	—	297
安政3年 上	21 2 1	—	238 0 0 0	—	—	粉糖170	—	—	—	50 3 0 0	—	—	—	干粕20
安政3年 下	3 0 0	—	—	—	—	糠174	—	—	—	145 4 1 0	43	—	—	282
安政4年 上	—	—	—	100	—	糠209	—	—	—	66 9 0 0	—	—	—	生粕19
安政4年 下	5 0 0	—	—	—	—	糠217	—	—	—	159 1 0 0	—	555	—	255
安政5年 上	227 0 0	—	509 0 0 0	—	—	糠185	—	—	—	36 0 0 0	—	—	—	28
安政5年 下	5 0 0	—	—	—	—	糠196	—	—	—	113 4 5 0	34	465	—	220
安政6年 上	50 0 0	—	181 1 6 2	—	—	糠136	—	—	—	36 0 0 0	—	—	—	64
安政6年 下	—	—	—	—	—	糠136	—	—	—	163 4 9 5	101	452	—	235
万延元年 上	107 0 0	—	110 1 0 0	110	—	糠169	—	—	—	203 1 8 0	92	602	—	237
万延元年 下	11 2 0	—	—	—	—	糠167	—	—	—	67 6 7 0	—	—	—	24
文久元年 上	—	—	1 0 0 0	—	—	—	—	—	—	—	117	628	—	—
文久元年 下	—	—	—	—	—	粉糖213	—	—	—	88 8 5 0	—	—	—	6
文久2年 上	24 0 0	—	40 0 0 0	—	—	糠214	—	—	—	273 3 5 0	205	812	—	278
文久2年 下	2 0 0	—	—	—	—	糠187	30	—	—	114 7 0 0	—	—	—	生粕33
文久3年 上	64 0 0	—	121 0 0 0	—	—	糠189	30	—	—	270 8 0 0	279	767	—	260
文久3年 下	12 0 0	—	—	—	—	糠242	—	—	—	104 0 0 0	—	—	—	211
元治元年 上	—	—	65 0 0 0	—	—	—	—	—	—	—	345	839	—	—
元治元年 下	101 0 0	—	—	—	—	50: 粉糖236	—	—	—	92 6 0 0	—	—	—	干粕65
慶応元年 上	118 0 0	—	87 0 0 0	—	—	糠256	—	—	—	217 7 5 0	426	687	—	261
慶応元年 下	—	—	—	—	—	糠164	26	—	—	89 6 0 0	—	—	—	生粕26
慶応2年 上	12 0 0	—	147 0 0 0	—	—	26	—	—	—	169 1 0 0	285	591	—	生粕26
慶応2年 下	190 2 0	—	—	—	—	7: 粉糖63	—	—	—	41 9 0 0	—	—	—	—
慶応3年 上	229.5 0 0	—	51 0 0 0	—	—	15:	—	—	—	107 7 0 0	405	724	—	干粕114
慶応3年 下	1 0 0	—	—	—	—	粉糖165	—	—	—	63 5 5 0	—	—	—	—
明治元年 上	39 0 0	—	—	麦2	—	25: 粉糖39	—	—	—	157 4 5 0	245	225	—	干粕215
明治元年 下	—	—	—	—	—	25: 粉糖133	—	—	—	80 5 0 0	—	433	—	50
明治2年 上	23 0 0	—	—	—	—	12: 粉糖91	—	—	—	166 7 0 0	御酢226	1,117	干粕134	干生粕167
明治2年 下	—	—	—	—	—	粉糖93	—	—	—	35 6 0 0	—	—	—	18
明治3年 上	1.5 0 0	—	—	—	—	43: 163粉糖	—	—	—	126 2 0 0	御酢212	1,381	—	干生粕95
明治3年 下	—	—	—	—	—	43: 170粉糖	—	—	—	71 7 0 0	—	—	—	干粕57生粕22
明治4年 上	—	—	—	2	—	36樽: 170粉糖	—	—	—	27 7 7 5	—	—	—	干生粕172
明治4年 下	30 0 0	—	—	—	—	36樽: 195粉糖	—	—	—	706 7 0 1	163 7 0 0	305樽7分運	1,170	干生粕172
明治5年 上	34 2 0	—	—	—	—	—	—	—	—	24 1 0 9	62 5 0 0	—	—	干粕3生粕56
明治5年 下	—	—	—	—	—	—	—	—	—	80 6 2 5	176 1 0 0	—	—	干粕16生粕56

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

粕		塩				味噌				味噌			
伊豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店
俵 貫 匁	俵/樽	俵	俵	俵	俵			貫 匁 貫		駄 樽	樽 斗 升 合	樽/駄 石 斗 升 合	
(226 0 0)		—	—	(153)	—	—	—	(3樽0 0)	—	—	—	—	—
353 0 0		—	—	180	—	—	—	4樽2 910	—	—	—	—	—
71 2,030 700		—	—	280	—	—	—	—	—	—	—	—	—
81 769 800		—	753	383	—	—	—	21 700	—	—	—	—	—
106 258 1		—	2,061	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
181 93 250		—	224	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
297 282 80		—	1,446.50	210	—	—	—	—	—	—	—	—	—
320 221 500		—	250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
325 197 800		—	1,769	714	—	—	—	7樽46 400	—	—	—	—	—
343 153 590		—	556	—	—	—	—	3樽72 380	—	—	4 0 0 0	—	—
327 191 200		—	1,531	319.5	—	—	—	5樽51 800	—	3	2 0 0 0	—	—
290 666 200	(112俵 下り粕19樽)	—	1,059	—	—	—	—	211 340	—	—	5 1 1 5	—	—
415 0 0	(千粕55俵 下り粕7樽)	—	1,764.50	291	—	—	—	159 590	—	2	24 2 9 5	(2樽)	—
486 5分 0		—	264	—	—	—	—	301 340	—	2	4 0 8 0	—	—
455 0 0		—	1,009	294	—	—	—	640 130	(4)	—	2 0 0 0	—	—
548 5 200		—	810	—	—	—	—	643 34	(7)	—	1 1 4 0	—	—
599 5 700		—	2,630	226	—	—	—	—	(6)	—	1 0 0 0	—	—
664 12 500		—	1,373	—	—	—	—	—	(4)	—	—	—	—
539 0 0		—	3,627	311	—	—	—	—	—	—	—	—	—
637 0 0		—	1,579	—	791	—	—	—	—	—	—	—	—
563 3 900		—	3,801	(301.5)	2,194	—	—	—	—	—	—	—	—
671 0 0	粕230俵	—	956	—	1,360	—	—	—	—	—	—	—	—
452.5 0 0	干粕253俵	—	3,986	(366.5)	879	—	—	—	—	—	—	—	—
456 0 0	干粕214俵	—	1,124	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
446 0 0		—	2,819	483俵5分	—	—	—	—	—	—	—	—	—
353 0 0		—	1,833	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
407 0 0	粕236俵	—	2,677	612.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
427 0 0	干粕224俵	—	1,501	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
415 0 0	干粕101俵	—	3,711	749	—	—	—	—	—	—	—	—	—
343 0 0	干粕180俵	—	1,194	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
262 0 0	干粕63俵	—	4,206	633	—	—	—	—	—	—	—	—	—
203 0 0	干粕72俵	—	1,015	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
297 0 0		—	2,763	448	—	—	—	—	—	—	—	—	—
352 67 100		—	633	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
211 0 0		—	1,669	818	183	—	—	—	—	—	—	—	—
161駄 1分	粕2樽	—	940	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,833	1,078	1,077	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	492	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	2,130	1,318	188	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,201	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	2,937	1,043	55	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,018	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	3,303	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	957	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	3,792	824	726	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	698	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	2,289	653	2,313	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	3,402	1,533	1,015	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	751	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	815	539	18	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,960	685	100	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,418	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	2,403	1,021	556	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	187	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	838	394	1,540	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	461	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	837	2,148	652	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	454	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	867	512	56	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	251	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,083	615	1,130	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	738	—	2,321	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,097	719	1,524	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	784	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,389	395	538	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	7,333	—	1,096	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	1,601	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		—	3,218	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(註) — は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。() は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。■ は虫損を示す。

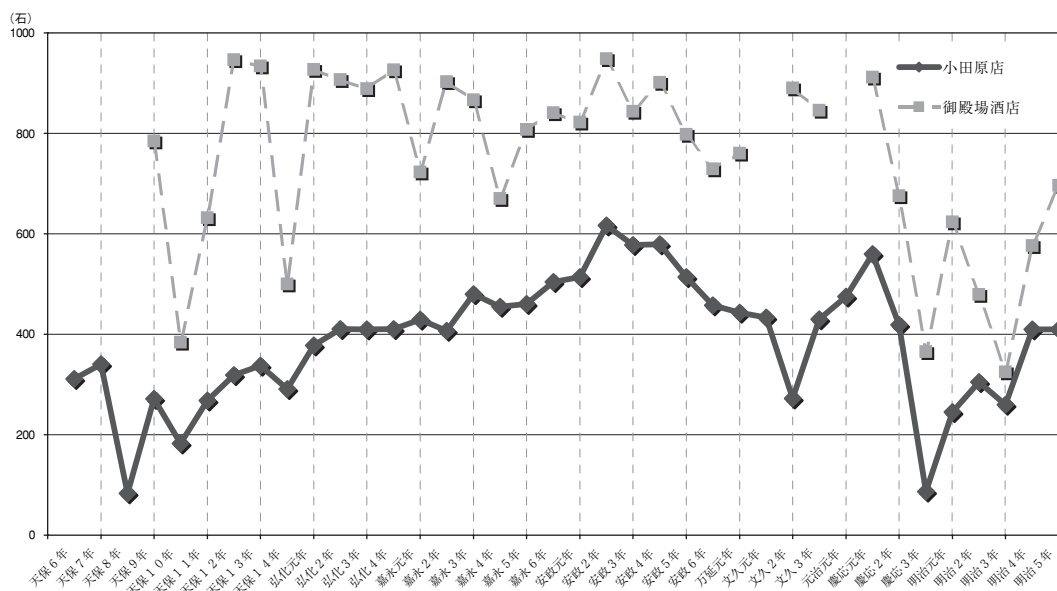


図1. 小田原店と御殿場酒店の酒造高

(出所)「小田原店勘定細見帳」「御殿場酒店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

融資産の部では嘉永5年上期に15両1分ト10匁9分3厘、塩250俵「郡内方々へ預ケ分」とあり、安政元年(1854)上期には210匁4分6厘「塩郡内ニ預ケ」61俵、また、安政2年下期は14両3分ト11匁「郡内方々預ケ塩取合」224俵などの記述から、郡内地域と塩の取引のあったことが推察される。嘉永期までは小田原店または伊豆店から醤油を買入れていることが多い。米は「本店買入米」と「⑪店買入」とがある。どちらの買入米もあくまで酒造用および飯米としての買入であり、米の販売は殆ど行っていない点が小田原店と異なる。酢を継続して販売しており、小田原店や沼津 ㊦店から仕入れている時もある¹⁹。本店とは酒代諸色代の貸し借りがある²⁰。

②小田原 ㊦店

文化3年に幕府による「酒造勝手造り令」が公布された翌年、日野屋は相模関本に ㊦酒造店を出した。関本村は矢倉沢往還の宿場的な性格をもった村である。開店の経緯は、本店支配人である多兵衛、平兵衛、宗助、宗兵衛差出、日野屋兵右衛門宛、文化9年正月「㊦酒店要用控」に次のように記されている。——く関本村伝蔵が所持する99石の酒株、居屋鋪、蔵、諸道具を、期間15年、借料年3両で借り受け、また同村、角兵衛所持の居屋鋪を期間15年で借り受け、地代を年に金2分払う。関本店を御殿場本店の「附店」とし、「歩持」は御殿場本店支配人で構成される。「歩持」が御殿場本店から退店する際や、老年による退店の際は、関本店の経営からも退く。建物普請、諸道具、諸入用金が必要な際は、借用土臺金として本家から借り、年1割の利息を払う。年々の酒造元手金は御殿場本店から借用し、土臺金同様、年1割の利息を払う。本家、本店以外の外部からの借金、及び「歩持者」の ㊦店への貸付けを禁止

¹⁹ 天保11年上期、天保13年上期、天保14年下期。

²⁰ 天保10年下期、天保13年下期、天保14年下期、弘化3年下期、嘉永4年下期の「㊦店諸色かりメ」や、弘化3年下期、安政2年下期の「㊦店諸品代かし」など。

する)。

また、関本から小田原への移設については、文政2年7月「(田 酒店場所かへの件ニ付)²¹」によると以下の理由があげられている。——く店の不勘定、善兵衛(店員)の一件、屋敷がせまく元来角兵衛および伝蔵からの借用で、関本村内か小田原あたりの適当な屋敷に引越しを希望する)。

このようにして、文政2年に小田原城下に近い池上村に店を移し(田 店と称するようになった。 田 店の設置および小田原へ移設した文化から文政期は、『小田原市史』によれば、酒株譲渡や新規酒造開業者が小田原地域に続出した時期である²²。

小田原店の主力商品は、酒、醤油、米、大豆、小麦、焼酎である。酒は醸造しているだけでなく、買入れもしている。地酒、下り酒などを仕入れており、御殿場酒店から買入れている場合もある²³。大豆、小麦など醤油原材料品は仕入れだけでなく販売もしており、地域の需要に応える側面をもつとみられる。醤油醸造を同じく営んでいた伊豆店よりも大豆の売高が多い。

小田原店の売高で注目されるのは、米の販売量が極めて多い点である。小田原店と同様に酒造業を営む御殿場酒店の米の買入高と比較しても、小田原店の米取扱いは際立っていることがわかる。天保9年上期から明治5年上期の米買入実数をみると、小田原店は御殿場酒店よりも概ね上回っている。ところが酒造高でみると、先述したように御殿場酒店のほうが小田原店よりも2倍あるいはそれ以上の酒を造っている。すなわち小田原店において、米は、酒造および自家消費用のためにのみ買入れているわけではなく、販売商品としても扱われていたといえる。実際、小田原店における米の売高は、御殿

場酒店、伊豆店、沼津店と比しても他店を圧倒している。米は小田原店の主力商品の一つであったわけである。なお、小田原店では、御殿場酒店同様、焼酎の買入れと販売も行っており、買高、売高ともに、小田原店のほうが御殿場酒店より勝っている。

大量の米の仕入れ先について「覚」における米の記載から確認すると、小田原店は蔵米がかなり多い。しかし他店では蔵米の他にも遠隔地米の取引があったことがわかる²⁴。

蔵米・遠隔地米の買入

小田原店	蔵米	田代米	土肥米
御殿場酒店	蔵米	長門米	加賀米 膳所米
伊豆店	蔵米	長門米	加賀米 膳所米
		水野米	駿東米 下り米
沼津店	蔵米	長門米	水野米 伊州米

小田原店で、遠隔地米よりも蔵米の記述が圧倒的に多いということは、小田原藩との結びつきの強さを示している。嘉永5年下期から明治4年上期の「覚」における金融資産の項では、一貫して50両が御用達金あるいは用達金として計上されている。本店の文久元年「店勘定細見帳」には「御用金之覚」の項があり、総額5,632両ト14匁5分にのぼっている。なお、日野屋忠助(三代目兵右衛門)は、文化14年に小田原藩から二人扶持を与えられ²⁵、天保9年には名字帯刀を許されている²⁶。これらは日野屋の御用商人としての地位の確立を物語るものといえる。小田原店の経営動向については4章および

²⁴ 鈴木直二は、地方米国市場としての米穀積出港に着目し、駿河および相模の港および川港について次のように列挙している(鈴木直二(1977), 713頁)。

国名	港名	(川名)	河川の「川港」
駿河	岩淵	(富士川)	鰍沢(岩淵は御城米のみ)
相模	須賀	(相模川)	厚木

²⁵ 文化14年7月9日「(冥加金差上等奇特に付其身一代二人分下し置かれるに付)」(近江日野商人館所蔵)。

²⁶ 天保9年11月18日「(実意の取斗により苗字脇差免に付)」(近江日野商人館所蔵)。

²¹ 近江日野商人館所蔵。

²² 『小田原市史』通史編近世(1999), 489頁。

²³ 天保9年下期など。

5章で詳細に論じることにする。

③伊豆 ㊤店

分家の山中与兵衛が天保7年10月に本家に譲渡した委細については、同年の「譲渡申証文之事（日野屋太三郎建物等譲渡ニ付）²⁷」によると、屋敷一カ所、醤油蔵二カ所、醤油道具すべて、穀蔵一カ所、古雑蔵一カ所、質物蔵一カ所、店建物一カ所、諸道具が金1,638両2分2朱で譲渡された。㊤店と称する伊豆店は、年一回の決算を行っている。弘化2年（1845）には「訳書」があるが、その他の年にはない。すなわち弘化元年までは仕入高が不明であり、帳簿としては不完全な面がある。嘉永5年から明治4年は「仕入高」として仕入合計金額があげられているが、その内訳は嘉永5年、嘉永6年をのぞき記述がない。

伊豆店は醤油醸造店であるが、醤油の他に、米、大豆、小麦、酢、粕、塩などを販売している。醤油は嘉永期、安政期に売上が増大し、万延以降ゆるやかに減少している。

小麦の売高は小田原店を概ね上まわるが、大豆の売高は小田原店より低い。地大豆とともに御殿場地方の特産品である御厨大豆の取扱いのあったことが、「覚」の在庫記載から確認できる。小麦は「𪛗店へ小麦代かし」として安政6年に81両余、慶応2年（1866）に「小麦残代店かしメ」として195両余が計上されている。

粕の売高は弘化4年以降、御殿場酒店を常に凌駕している。また、粕は小田原店では販売されていない。

酒の売高は天保8年～11年、嘉永4年、万延元年（1860）～文久元年、文久3年に確認できるが、そのほかの年では見られず、焼酎については扱いが全くない。酒類は恒常的な取扱商品ではなかったといえる。

沼津店ほどの量ではないが、一貫して酢を

売っている。有物の記述から、尾張の^{まるかん}酢を扱っていることがわかる。酢は特に沼津店での取扱いが豊富なため、そちらで詳述する。

他店では取扱いがなく、伊豆店でのみ販売されている特徴的な商品として、天保から嘉永期の古着販売、天保から文久期の成茶販売、嘉永期以降の鉄販売が目される。味噌の販売も伊豆店での取扱いが目立ち、その売高は万延元年がピークで2,600貫を超えている。他店との取引を示す記述がほとんどみられないが、安政2年には「𪛗店味噌代ぶん」として1両ト3分2厘の貸しがある。

④沼津 𪛗店

沼津店は二代目兵右衛門が明和7年（1770）に沼津に創設した店舗で、次男与兵衛の分家に際して譲渡され、当初𪛗店と称していた。だが伊豆店同様、経営の行き詰まりから、嘉永元年に「一札（家屋敷諸株質入売払の儀付）」が与兵衛、定次郎から兵右衛門に差し出され、本家に引き取られることとなり、嘉永3年に380両で屋敷が買取られた。翌4年に建物、器具、土地あわせて1,034両2朱で譲渡され、𪛗店は𪛗店と改称した²⁸。嘉永7年（安政元年）には日野屋和平に名義替えとなっている²⁹。𪛗は年二回決算であったが、𪛗は明治元年をのぞき年一回決算である。

𪛗店の前身である𪛗店では、「覚」に「手酒」があるので³⁰、自家醸造を行っていたとみられる。一方で、遠州酒を弘化3年上期に15石8斗7升2合、弘化3年下期に20石3斗2合買

²⁸ 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上（1976）、62頁。

²⁹ 嘉永3年3月「譲渡屋敷証文之事」（近江日野商人館所蔵）。他に嘉永7年（安政元年）の史料に「[[酒造稼を和平に譲たき願状]]」（近江日野商人館所蔵）や、嘉永7年6月「乍恐以書付奉願上候（酒造鑑札）」（近江日野商人館所蔵）などがあり、酒造高50石が御厨御殿場村忠助から沼津宿上土町和平に譲渡されている。

³⁰ 弘化2年下期152石、弘化3年下期292石4斗、弘化4年上期154石。

²⁷ 近江日野商人館所蔵。

入れたり、弘化2年下期には㊦店から地酒を買入れてもいる³¹。下り酒では弘化3年下期の「覚」に、新伊丹16駄、灘酒買入もの2駄半などが見られ、多種の下り酒を扱っている。

𠂔店における酒の売高実数でみると、小田原店や御殿場酒店を上回るほどの量があったわけではない。𠂔店の酒取扱いで他店と異なる点は、諸白に力点がおかれている点である。特に文久3年以降は例外なく諸白と明記されている。先に述べたように、「覚」における酒銘柄でも灘酒などの下り酒の記載が多く見られる。他にも江戸酒、地酒の銘柄記述が、他店に比して多種で豊富である点も特徴的である。𠂔店は醸造というより酒の仕入れと販売に重点を置いているといえる。全体を通じてみれば、𠂔店の主力販売品は、諸白、酢、塩、大豆、醤油

であるといえる。

焼酎は明治期になり買入れがあるが、それ以外の時期においては買入れ、販売ともにない。米の買入れが小田原店、御殿場酒店に比して極めて少ない。醤油の買高、売高は嘉永から安政期にかけて減少し、文久期以降は一定しないが概ね減少傾向にある。

小田原店同様、酢の買入れがあり、その量は小田原店より常に多い。𠂔店時代も𠂔店になってからも、「覚」における酢の在庫として㊦印が極めて頻繁に記載されていることが注目される。尾張産の酢には㊦の樽印が使われていたため、酢の仕入先として尾張があげられる。㊦の印は近世期の尾張において複数の酢醸造家、たとえば半田の中野又左衛門家³²や名古屋の笹田伝左衛門家³³が使用していた。山中

表4. 出店売上高

会計年	小田原店		御殿場酒店		伊豆店		沼津店	
	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.
嘉永4年	4,468.1.0	8.86	2,238.1.0	8.39	2,117.2.0	10.00	1,610.3.0	14.71
嘉永5年	3,817.1.0	5.48	2,417.1.0	3.04	2,355.3.0	0.00	2,560.1.0	5.50
嘉永6年	5,515.3.0	8.30	2,469.3.0	11.98	1,969.1.0	7.16	3,285.3.0	2.00
安政元年	4,573.3.0	12.40	2,698.2.2	3.49	2,663.1.0	11.36	4,428.3.0	3.12
安政2年	4,040.0.0	12.06	3,031.2.0	8.09	1,868.0.0	5.38	5,164.2.0	4.83
安政3年	3,803.0.0	11.23	2,898.0.0	1.51	1,917.2.0	13.94	4,225.2.1	1.90
安政4年	3,535.0.0	2.31	2,794.3.0	5.44	1,715.1.0	4.02	4,468.2.3	1.00
安政5年	4,189.0.0	14.72	3,053.0.0	12.68	1,965.3.0	10.61	5,055.1.0	13.59
安政6年	3,640.2.0	11.40	2,787.0.0	14.00	1,769.3.0	1.50	5,376.0.2	1.75
万延元年	4,059.2.0	13.90	3,457.1.0	29.49	3,314.3.0	6.27	5,660.3.0	12.94
万延2年	—	—	—	—	3,668.3.0	0.51	6,421.1.0	8.29
文久2年	4,601.0.0	13.34	3,766.2.0	4.42	2,249.1.0	3.80	9,806.0.0	14.06
文久3年	4,498.3.0	4.13	4,467.3.0	10.73	2,415.2.0	2.64	10,902.3.0	1.56
元治元年	—	—	—	—	2,939.2.2	1.20	9,553.1.2	1.62
慶応元年	7,262.1.0	8.50	5,657.0.0	7.08	3,722.0.0	8.38	11,437.2.0	4.20
慶応2年	7,665.0.0	13.07	6,658.2.0	2.40	4,587.1.0	0.84	12,128.1.0	8.94
慶応3年	13,640.2.0	10.61	7,637.2.0	9.63	4,981.2.0	13.05	15,582.1.0	1.12
明治元年	9,996.0.0	1.42	7,169.3.0	6.73	5,158.2.0	9.64	12,691.3.0	0.36
明治2年	10,574.3.0	4.56	6,495.1.0	0.47	5,893.2.0	2.64	16,563.1.1	7.73
明治3年	10,485.1.0	2.92	8,459.1.0	8.77	4,660.2.0	14.11	18,947.2.0	4.39
明治4年	9,026.0.0	4.63	10,651.1.0	3.82	4,631.2.0	12.89	19,300.2.0	2.61
明治5年	7,759.3.0	2.45	8,168.2.0	5.79	—	—	—	—

(出所)「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) — は帳簿がないことを示す。

³¹ 売上差引の項に14石9斗4升6合「地酒㊦」も買分ヲ引」と記載がある。

³² 現ミツカングループ本社。

³³ 現マルカン酢株式会社。

家の文書には、作成年不詳ではあるが、酢屋又左衛門、慶介差出し³⁴、日野屋和平、喜兵衛受取りの「御約定申一札之事³⁵」に、「酢仕切之儀」「酒仕切り之儀」などについて記された文書が残っていることから、中野又左衛門家から酢を買入っていたことを確認できる。沼津店と中野家で取引があったことは、中野家の明治2年の「大福帳」に、「沼津 日野屋和兵衛 計780樽³⁶」が販売先の一つとして記載されていることから確認できる。それによると、この年の日野屋への酢の販売銘柄は「なかの」が290樽で、並酢が490樽である。同じく明治2年の沼津店の「勘定細見帳」では、㊟酢を852樽買入れている。

他店舗との関連記述をみると、伊豆店から

「銭代かり」が安政2年より継続している。安政5年には、343両ト11匁7分9厘が「相州大豆698俵本店より」とあり、文久2年に10両の「㊟店大豆代かり」がある。

以上のように各店舗の取扱品目を見ていくことにより、山中家の出店が醸造業のみならず、醸造品ならびにその他の諸品の販売業にも従事していたことが明らかとなった。各店舗の収益費用勘定から売上合計金額を示したものが〈表4. 出店売上高〉で、売上総利益を示したのが〈表5. 出店売上総利益〉である。これによれば、沼津店の売上高が最も高くはあったものの、収益は低かったことがわかる。次章以降では、小田原店の経営活動に焦点を絞り分析する。

表5. 出店売上総利益

会計年	小田原店		御殿場酒店		伊豆店		沼津店	
	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.
嘉永4年	1,495.0.0	1.2.7	547.2.0	11.4.0			92.2.0	8.0.8
嘉永5年	1,662.1.0	9.8.6	836.2.0	11.8.0	637.1.0	9.0.4	225.0.0	7.5.9
嘉永6年	1,982.1.0	6.7.0	835.2.0	5.7.4	492.1.0	4.2.0	435.0.0	5.4.3
安政元年	1,062.3.0	1.5.8	1,183.2.0	5.3.4	841.1.0	7.9.5	205.0.0	6.7.4
安政2年	1,302.0.0	0.8.3	1,376.3.0	2.1.9	492.1.0	14.8.6	398.1.0	14.3.3
安政3年	949.0.0	14.2.5	959.0.0	7.4.6	535.3.0	2.3.2	431.2.0	3.4.4
安政4年	1,517.2.0	0.2.2	964.2.0	4.8.3	422.2.0	1.3.6	620.0.0	4.5.4
安政5年	1,223.0.0	9.2.6	1,114.1.0	10.2.9	339.1.0	13.5.3	516.3.0	1.0.7
安政6年	1,374.1.0	7.8.6	1,201.0.0	14.4.6	396.1.0	9.4.2	443.1.0	13.7.3
万延元年	1,220.3.0	13.6.6	1,262.2.0	2.2.5	986.2.0	5.9.8	556.1.0	9.5.4
文久元年					959.2.0	1.2.0	107.0.0	4.6.6
文久2年	1,971.0.0	14.9.5	1,479.1.0	3.0.7	564.2.0	6.2.7	596.0.0	7.6.9
文久3年	1,936.2.0	1.7.2	1,272.0.0	5.9.7	558.0.0	9.2.4	1,194.3.0	10.7.0
元治元年					1,033.3.0	1.9.9	466.3.0	1.8.7
慶應元年	3,402.3.0	2.0.8	2,645.3.0	7.5.8	1,337.3.0	2.5.5	1,156.3.0	2.7.6
慶應2年	2,767.3.0	13.8.6	3,494.3.0	10.8.4	1,698.3.0	11.3.5	1,604.3.0	8.3.8
慶應3年	2,586.1.0	6.1.4	3,365.0.0	14.7.4	937.0.0	10.8.0	1,331.1.0	5.2.8
明治元年	4,021.1.0	3.4.3	1,721.0.0	4.6.1	1,325.0.0	4.3.4	925.2.0	10.5.6
明治2年	2,959.0.0	7.4.4	1,314.2.0	0.2.1	174.3.0	3.2.1	107.2.0	13.8.2
明治3年	3,782.1.0	8.2.3	2,616.1.0	12.9.5	1,866.3.0	9.9.9	193.2.0	3.3.8
明治4年	1,749.0.0	14.7.4	3,831.1.0	6.2.3	564.3.0	1.8.7	839.0.0	13.0.0
明治5年	854.0.0	2.2.2	3,966.1.0	0.8.0				

(出所)「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) ——は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。

³⁴ 「尾州半田」の捺印がある。

³⁵ 御殿場市立図書館所蔵。

³⁶ 『中埜家文書にみる酢造りの歴史と文化』2(1998), 資料28「江戸方面への酢の販売(明治2年)」, 64頁。中埜又左衛門家の帳簿分析については曲田浩和(2002)参照。

3 小田原店における勘定帳の構成と特徴

小田原店は秋（上期）と春（下期）の年二回決算を一貫して行い「勘定細見帳」という決算簿を作成している³⁷。以下では天保10年上期を例に、その記載内容を具体的に見ていくことにし、次に帳簿記載の特徴を検討する³⁸。

（1）小田原店における勘定帳の構成

覚

- 一 金三拾貳兩三分ト 八匁六分八厘 新酒廿五七六石（1）
- 一 金四拾兩壹分ト 七分九厘 元米諸味かし米七六三十石六斗（2）
- 一 金六兩也 味噌九分目（3）
- 一 金貳分ト 壹匁五分八厘 酢貳樽（4）
- 一 金五百四拾三兩壹分ト 五匁五分五厘 百四十七匁百六十五匁 正油造り拾九本ト三百石（5）
- 一 金五兩也 同上之上ケ三石（6）
- 六〇
- 一 金拾兩也 同並拾石（7）
- 石
- 一 金八拾八兩壹分ト 六匁貳分 小麦百六拾五七四七俵（8）
- 一 金壹兩ト 六匁六分七厘 大豆貳俵也（9）
- 七貳
- 一 金拾六兩壹分ト 拾匁七分壹厘 裸麦四拾六石壹貳俵（10）
- 一 金貳拾三兩ト 九匁四分七厘 小豆三拾三五七俵（11）
- 一 金三兩三分ト 八匁三分三厘 大麦五斗入十石八四俵（12）

³⁷ 勘定帳の標題は必ずしも一定しておらず、特に天保期は様々である。天保4年下期「㊥店勘定帳」、天保5年下期「㊥店勘定細見扣」、天保6年上期「㊥店勘定細見帳」などがある。しかし天保10年下期以降は「勘定細見帳」と表記されることが多いので、本稿では便宜的に「勘定細見帳」とよぶことにする。

³⁸ 「天保十己亥十一月吉日㊥店勘定目録」（近江日野商人館所蔵）。行末の（数字）は引用者による。

- 一 金三兩貳分ト 壹匁七分六厘 赤穂塩三拾八五俵（13）
- 一 金貳兩三分ト 三匁 成茶貳本（14）
- 一 金百五拾五兩貳分ト 九匁六分貳厘 内米三貳一貳百三拾俵（15）
- 一 金拾八兩三分ト 七匁七厘 同四拾俵 内十同断 九俵車四軒 廿一俵座ニあり（16）
- 一 金貳拾壹兩ト 拾三匁五分八厘 同四拾五同断 俵 但し白米四十貳俵分三七ニスル（17）
- 一 金貳拾四兩貳分ト 壹匁七分 切手米五拾貳同断 俵（18）
- 十八口
- ✕ 金九百九拾六兩ト 九拾四匁七分壹厘（19）
- 亥十一月廿日改
- 一 金四拾五兩壹分壹朱ト 六分八厘 三貫六百廿四文 方々時かし惣✕高（20）
- 同断
- 一 金貳拾兩三分ト 拾五貫八百拾五文 大家時かし惣✕（21）
- 一 金拾兩也 熊七殿㊤代預ケ（22）
- 一 金三拾六兩三分ト 三匁三分六厘 ㊤店正油かし✕（23）
- 九月ㄱ
- 一 金百六兩也 ㄱ店預ケ✕（24）
- 十一月廿日改
- 一 金廿兩貳分貳朱ト 百廿八貫百拾九文 店有金残✕（25）
- 六口
- ✕ 金貳百三拾九兩壹分三朱ト 四匁四厘 百四拾七貫五百五拾八文
- ㊤七〇 此金廿壹兩ト 四匁八分（26）
- 貳口
- ✕ 金千貳百五拾六兩壹分三朱ト 百三匁五分五厘（27）
- 内
- 一 金五百兩也 元手金引（28）
- 一 金貳百四拾四兩ト 壹匁壹分壹厘 ㄱ店指引✕かり（29）

十月二日分

- 一 金百五拾兩也 同断かり (30)

同十九日分

- 一 金貳兩ト 六匁貳分四厘 時蔵殿木綿代取分
かり (31)

十一月十九日分

- 一 金拾貳兩也 同惣兵衛に渡しかり (32)
- 一 金壹兩三分也 桑原行酒袋代かり (33)
- 一 金拾三兩貳分ト 三匁六分八厘 大森谷五郎
殿大豆代かり (34)
- 一 金壹兩ト 六匁六分七厘 ちむれ文平殿同断
かり (35)
- 一 六貫六百文 本山講預り (36)
- 一 拾貫六百廿四文 車屋四軒弘方かりに (37)
- 一 金四兩壹分三朱也 桶屋弘方かり (38)
- 一 三貫八百卅六文 縫物師かり (39)
- 一 金四兩也 蔵日用かり (40)
- 一 金百兩也 普請引当 (41)
- 一 金五拾兩也 同断戌引分 (42)
- 一 金五拾兩也 給金引当 (43)
- 一 金五拾兩也 買米高直に引置ク (44)

十七口

- に 金千百八拾貳兩貳分三朱ト 拾七匁七分 廿
壹貫六十文 此金三兩ト 五分四厘 (45)

さし引

- に 金七拾貳兩ト 拾匁三分壹厘 過上徳也
(46)

此所

- 金七十貳兩也 本家へ為登金 (47)

戌冬造り高

- 一 酒百八拾貳石七斗貳升

同十月に亥九月迄買入に (48)

- 一 同七拾六石四斗一升一合 (49)

亥八月に作り高

- 一 新酒七拾貳石八斗 (50)

三口

- に 三百卅壹石九斗三升一合 (51)

内 一 三百五拾八石壹斗貳升六合 うり高惣に

(52)

- 一 廿五石 新酒有物 (53)

さし引 に 五拾壹石壹斗九升五合 過 うり出
し (54)

- 外に焼酎 十四石貳斗六升 うりあり (55)

亥十一月廿日改 掛方惣に

- 一 金千七百八拾壹兩ト 三分六厘 (56)

①七〇

定に

戌秋改に当改迄に

- 一 金百四拾七兩也 ふエル (57)

尤此内

- 金拾壹兩斗 時かし〇印出しに此内へ入ル (58)

又

- 金拾壹兩ト 六匁六分七厘 浦賀いつみや塩代〇
印出ル入ル (59)

に

訳書

戌十月改

- 一 金九百九拾三兩貳朱ト 九拾五匁三分 酒正
油米大豆品々有物 (60)

戌冬に当改迄買入に

- 一 金千六百九兩ト 五分五厘 米二千百十五俵
ト三斗五升 切手共入テ (61)

同断

- 一 金貳百七兩三分 壹匁六分七厘 大豆三百七
十三俵 (62)

- 一 金三拾六兩貳分ト 三匁五分八厘 小豆七十
三俵 (63)

- 一 金百四拾貳兩壹分ト 八匁三分四厘 小麦貳
百六十六俵 (64)

- 一 金四拾九兩壹分壹朱ト 拾四匁八分 大麦ツ
キ代に (65)

- 一 金三拾四兩三分ト 拾匁九厘 裸麦九十八俵
(66)

- 一 金七拾兩ト 貳匁五分六厘 塩取合六百四拾
九俵 (67)

- 一 金三百拾七兩貳分ト 九匁四分五厘 酒百三

拾駄ト四石三斗一升一合 焼酎廿駄ト貳斗六
升五合 (68)

- 一 金廿壹兩壹分ト 四匁八分壹厘 酢五拾六樽
ト九斗七升 (69)

十口

- ✂ 金三千四百八拾壹兩壹分三朱ト 百五拾壹匁
貳分 (70)

内

- 一 金九百九拾六兩ト 九拾四匁七分壹厘 当改
あり物✂ (71)
- 一 金六拾五兩ト 九匁六分六厘 飯米七十八俵
麦六石九斗 (72)

二口

- ✂ 金千六拾壹兩ト 百四匁三分七厘 (73)

指引

- ✂ 金貳千四百廿壹兩ト 拾三匁八厘 (74)

当改賣上ケ惣✂高

- 一 金三千百七拾五兩貳分ト 五匁壹分九厘
(75)

古酒 三百拾石貳斗二升五合 (76)

新々 四十七石八斗七升七合 (77)

正油 四百七十七石一斗五升 (78)

正中 十七石六斗四合 (79)

米 千八十五俵 (80)

大豆 二百六十六俵 (81)

小麦 七十一俵 (82)

小豆 廿俵 (83)

大麦 百十五俵 (84)

酢味噌ひへかす糠品々✂ (85)

- 指引 ✂ 金七百五拾四兩壹分ト 七匁壹分壹厘
(86)

諸入用

- 一 金廿九兩三分ト 四十六文 諸入用✂ (87)
- 一 金九兩ト 八百廿二文 諸駄ちん✂ (88)
- 一 金六拾五兩ト 九匁六分六厘 飯米七十八俵
大麦六石九斗 (89)
- 一 金六拾五兩壹分ト 拾壹匁壹分 薪買入✂

(90)

- 一 金七兩ト 貳百八十文 車屋四軒払✂ (91)

- 一 金六兩壹分ト 七百六十六文 普請方払✂
(92)

- 一 金壹兩也 大工払✂ (93)

- 一 金九兩貳分貳朱ト 貳匁四分六厘 七百六十
文 桶屋払方✂ (94)

- 一 金四兩三朱ト 貳貫五百十貳文 普請日用方
払方 (95)

- 一 金五兩壹分ト 三百十貳文 縫物師払✂
(96)

- 一 金拾四兩貳分貳朱ト 五匁六百廿六文 調物
払方✂ (97)

- 一 金三拾五兩壹分貳朱ト 壹厘 酒樽買入✂
(98)

- 一 金七拾九兩三分ト 五百十四文 正油樽買入
✂ (99)

- 一 金三兩壹分一朱ト 貳百卅八文 薬礼✂
(100)

- 一 金廿貳兩貳分ト 八百五拾六文 蔵日用十七
人払方 (101)

- 一 金廿六兩貳分三朱ト 十八文 若者十一人か
し (102)

- 一 金三兩三分也 地代渡し (103)

- 一 金五拾兩也 給金引当 (104)

- 一 金五兩壹分ト 拾貳匁九厘 尙店諸色払
(105)

- 一 金四拾五兩壹朱ト 八匁貳分三厘 同取替払
方✂ (106)

廿口

- ✂ 金四百八拾七兩三分貳朱ト 四拾八匁五分五
厘 七貫七百六十六文 (107)

- ㊦六九 為金 四百八拾九兩三分ト 三匁六分壹
厘 (108)

無尽覚

- 一 金七兩貳分 新融通かけ金 (109)

- 一 金壹兩貳朱ト 拾三貫百九十二文 大成講か
け金 (110)

- 一 金拾七兩ト 五匁六厘 善照寺無尽十四番目
迄かけ金 (111)
- 一 金六兩貳分貳朱ト 六百五十七文 車屋無尽
五番目迄かけ金 (112)

メ

㊦利取遣り
覚

戌九月と二月迄

- 一 三貫拾五匁一分五厘 仝へ入分 (113)
- 内 七百五十八匁二分三厘 遣り分 (114)
- 々メ 貳貫貳百五十六匁九分二厘 取入分 (115)

二月と八月迄メ

- 一 貳貫八百三十八匁四分一厘 仝へ入取分
(116)

内 六百十六匁壹分七厘 遣り分 (117)

々メ 貳貫貳百廿貳匁貳分四厘 取分 (118)

貳七

メ 四貫四百七拾九匁一分七厘^(ママ) (119)

此金 七拾四兩貳分ト 九匁壹分六厘 (120)

右 仝へ受取候分也

以上が帳簿内の記述であり、裏表紙には「㊦店」と記されている。「小田原店勘定細見帳」の差出しは、このように「㊦店」もしくは「仝店」「仝店㊦店立合」などとなっている。この年は宛先の記載がないが、記載がある場合は「御本家様」と記されている³⁹。

「勘定細見帳」は、①「覚」と「内」による資産負債勘定の部、②「訳書」と「諸入用」による収益費用勘定の部、③「無尽之覚」による講の部、④「㊦利取遣り覚」による利息の部の4部で構成されている。以下、個々の内容について立ち入って見ていく。

①「覚」と「内」

(1)～(18)は現物資産で、酒、米、小麦、小豆などの醸造品および商品在庫である。18口ある在庫の合計(19)は996兩ト94匁7分1厘で、醤油が543兩を占めている。なお、醤油在庫が全体のかんりの部分を占める傾向は、幕末においても同様である。たとえば文久2年上期「覚」によると、現物資産総額は1,243兩ト7匁3分9厘であり、醤油諸味と生揚醤油は計730兩余を占めている。次の(20)～(26)は金融資産である。御殿場酒店への醤油貸しや本店への預け金、近隣への貸金などが含まれている。現金は少ない。現物資産合計と金融資産合計を合算したのが1,256兩1分3朱ト103匁5分5厘(27)で、これが資産合計となる。

次に「内」の見出しをもって始まるのが負債である。冒頭に記されている元手金500兩(28)は明治5年まで継続して同額が計上されている。本店からの借入れが(29)と(30)で、合わせて394兩余になる。他に主な負債は普請引当ての100兩(41)である。その他は商人からの木綿代、大豆代、酒代などの借入れや日雇い代がその内容となっている。給金引当ての50兩(43)は、「訳書」の「諸入用」の部でも記載があり(104)、二重計上されている。

資産合計から負債合計を差し引いて、72兩ト10匁3分1厘(46)を計上しており、それが「過上徳」とされ、すなわち純資産である。次の「此所本家へ為登金」72兩(47)は、本家への上納金額を書出したものである。このように為登金は毎年上期に純資産の算出をもとに計上されている。これについては後述する。

(48)から(54)は酒の在庫高を把握するための記述といえる。前期造高、前期買入高、当期造高の合計をまずだし、そこから売高と当期在庫の合計を差し引いて「さし引き うり出し」として酒の在庫高を算出している。ここでは焼酎の売高(55)も追記している。

売掛金は「覚」に含めず別立てとしており、

³⁹ 他の年では、差出しと宛先は、駿州 仝店改→江州日
埜御本家様(天保4年下期)、㊦店→山中御本家様
(天保5年下期)、仝店㊦店立合改→江州御本家様
(天保6年上期)などのように表記されている。

「掛方」(56)～(59)がその記述である。ここではまず売掛金合計(56)を示し、次に対前年増減額147両(57)を記している。

②「訳書」と「諸入用」

次は「訳書」と「諸入用」の部で、収益費用勘定に相当する。「訳書」ではまず、期主在庫である「酒正油米大豆品々有物」993両2朱ト95匁3分(60)を書き出す。これは天保9年上期の「勘定細見帳」の現物資産の総額と一致する。続いて米、大豆、小豆など、原料および商品の仕入実数と金額を記載している。この合計が3,481両1分3朱ト151匁2分(70)である⁴⁰。次の996両ト94匁7分1厘(71)は期末在庫で(19)と一致する。奉公人の衣食住は店の負担となる。よって、飯米78俵と麦6石9斗の合計額65両ト9匁6分6厘(72)の食費は自家消費であり、奉公人の労賃である。そして期末在庫(71)と自家消費(72)を合算して1,061両ト104匁3分7厘(73)が記載されている。この(70)から(73)を差し引いた2,421両ト13匁8厘(74)が、売上原価に相当する。(75)は売上高で、以下、(85)まで売上品名が列举される。その内容は、酒、醤油、焼酎、米が中心で、他に、大豆、小麦、小豆、大麦などあることから、醸造品と原料の両者を販売品として扱っていたことがわかる。なお、それらは実数のみが書き上げられ、それぞれの金額明細は記載されていない。「指引メ」は売上高(75)から売上原価(74)を差し引いた754両1分ト7匁1分1厘(86)で、これが売上総利益となる。

(87)～(108)は「諸入用」で販売原価以外の費用にあたる。諸入用、諸駄賃のあとに、再び飯米と大麦の労賃が65両ト9匁6分6厘(89)と記載され、(72)と二重計上となっている。費用の内訳は、酒および醤油醸造の設備投資、人件費、本店との差し引きで構成されている。これ

ら20口を合算すると計487両3分2朱ト48匁5分5厘ト7貫766文(107)となり、銭の値を銀に換算して算出しなおしたのが次の489両3分ト3匁6分1厘(108)である。なお、この天保10年上期は売上総利益から費用合計を差し引きした営業利益を算出していない。「小田原店勘定細見帳」では営業利益の記載がないのが通例であり、営業利益を算出しているのは、天保6年上期、弘化2年上期、安政4年下期、安政5年下期、安政6年下期、万延元年(1860)下期のみである。

③無尽之覚

(109)～(112)は無尽講への掛金である。なお、幕末には難村講や手段講への掛金などもみられる⁴¹。小田原藩はこうした無尽講や頼母子講の類によって、集金した金の一部を利殖にまわし、資金拡大を目指す政策をとっていた⁴²。

④㊦利取遣り覚

前年9月～当年2月の本店への支払利息3貫15匁1分5厘(113)から、同じく前年9月～当年2月の本店預り利息758匁2分3厘(114)を差し引いたのが、2貫256匁9分2厘(115)である。当年2月～8月の本店への支払利息2貫838匁4分1厘(116)から同じく当年2月～8月の本店預り利息616匁1分7厘(117)を差し引いたのが、2貫222匁2分4厘(118)である。そして(115)と(118)の合計が4貫479匁1分7厘(119)^(ママ)となり、更にこれを金に換算しなおして74両2分ト9匁1分6厘(120)を記載し、これが最終的に本店に支払う利息合計金額となる。

以上にみた帳簿形式は下期も同様の記載方式を採っており、天保から少なくとも明治初期に至るまで一貫して同じ形式で記述されている。

⁴⁰ (70)は計算上、5厘がつくはずである。(74)の計算は正しいので、原史料での書き忘れとみられる。

⁴¹ たとえば文久3年上期では「御上様へ難村講かけメ」として45両が記載されている。

⁴² 『小田原市史』通史編近世(1999)、926-928頁。

(2)「小田原店勘定細見帳」の特徴

「小田原店勘定細見帳」は資産負債勘定と収益費用勘定を備えた複式帳簿の形式を採用しているが、売掛金が「覚」に含まれていない。また、既述したように、給金引当てを資産負債勘定と収益費用勘定の両方に重複記載しており、労賃の一種である飯米、麦も、「訳書」と「諸入用」の両方に二重に記載されている。給金引当てについていうならば、費用として認識する一方、負債としても認識していたのであり、このような重複記載は、複式帳簿として未熟であるというより、帳簿記述者あるいは経営者の認識把握の二重性を示している。なお、給金引当ての重複記載は「小田原店勘定細見帳」では明治5年上期まで重複記載されており、「御殿場酒店勘定細見帳」にも見られる⁴³。

次に指摘しうる特徴は、「訳書」の情報量の豊富さである。通常は買入れから売上げを差し引いた粗利のみを記載するが⁴⁴、買入高の内訳実数、金額、総額、売上高の内訳実数と総額も記載している⁴⁵。ただし売上内訳金額の記載はない。

更に注目すべき点は、下期の「勘定細見帳」はいわば中間決算であり、翌年上期が本決算となっていることである。買入期間についての記載表記をみると、天保9年下期の「勘定細見帳」では、「十月改後^り」とあり、翌天保10年上期では「戌冬^り当改迄買入^メ」となっている。一方、売上期間においても、たとえば天保13年下期は「寅十一月改^り卯三月十日迄」とあり、天保14年上期では「寅十一月改後^り卯九月廿五日迄」となっている。このように、下期の帳簿は半年分を記載したもので、次の上期は下

期を含めた一年分が記載されている。すなわち、上期が本決算で下期はその途中経過を示す中間決算に相当している。このことは、下期の売上合計額や、原料、商品仕入れ実数、酒の造高が、翌年上期を上回ることがない点によって傍証される。

なお、小田原店と同様、年二回決算の御殿場酒店の「勘定細見帳」もまた、下期が中間決算で、翌年上期が本決算となっている。一方、本店、伊豆店、沼津^戸店は年一回決算であるため前述の二店とは異なる。年二回決算を行う店の中井源左衛門家後野糸店⁴⁶、西川甚五郎家江戸店⁴⁷など他家にもしばしばみられるが、中間決算、本決算の決算方式を採用している商家の例は非常に珍しい。なお、日野商人、矢尾喜兵衛家「店御帳」は年一回決算である⁴⁸。また、灘の嘉納治郎右衛門家「総勘定帳」(損益計算書)、「店卸帳」(貸借対照表)も年一回決算である⁴⁹。伊丹の小西新右衛門家でも、本家「勘定帳」「酒見味酛勘定帳」も、また小西家の江戸店である小西屋利右衛門店の決算簿「諸勘定之覚」も、年一回決算である⁵⁰。

4 小田原店における経営動向

第2章では山中家の出店四店舗を概観し、更に第3章で小田原店に照明をあて、天保10年上期の勘定帳に焦点を絞ってこれを子細に検討した。本章では天保4年下期から明治5年上期の「小田原店勘定細見帳」を分析し、小田原店の史的経営動向を探る。まず、小田原店における原料および商品の仕入れ、生産、販売を、

⁴³ 天保8年下期から文久2年上期。

⁴⁴ たとえば、長井嘉左衛門家大和屋九郎左衛門店「算用目録」における「利」の項では粗利のみが記載されている。

⁴⁵ 遠州三ヶ日で酒造業を展開した日野商人、階堂家の「店卸勘定帳」でも同様の記述方法がみられる。しかし日野商人に広く特徴的な記述方法であるといえるか否かは、更に豊富な個別事例を必要とする。

⁴⁶ 小倉栄一郎によると、中井源左衛門家後野糸店では、12月と新糸の出廻る前の5月の二回に分けて店卸を行い、年二回決算であった。しかし主力である仙台店やその出店、枝店は、年一回決算である(小倉栄一郎(1962), 143頁)。

⁴⁷ 賀川隆行(2002), 18-48頁。

⁴⁸ 末永國紀(2003)。

⁴⁹ 柚木学(1975), 227-240頁。

⁵⁰ 賀川隆行(1997), 10-52頁。

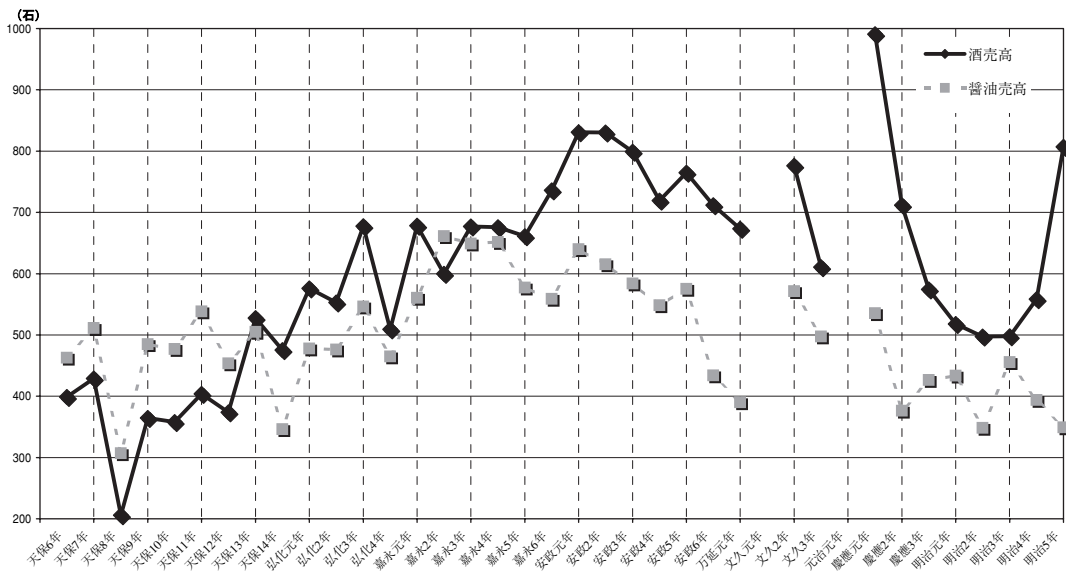


図2. 小田原店の酒売高と醤油売高

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

特に酒や醤油の推移に注意を払いながらその特徴的傾向をみる。次にこれを収益費用勘定における収支の変化を通して確認することで、小田原店の経営動向の特質を明らかにする。

(1) 仕入れ・醸造・販売の推移

第2章の〈表2〉および〈表3〉でみたように、小田原店の取扱い品目を大別すると、醸造品と、穀類などの原料品がある。穀類に関しては、大量の米販売を行っていることが明らかになった。

醸造品の仕入れには、酢や味噌も含まれている。これらの仕入れは継続的であるが、販売についてみると、酢は慶応3年下期以降、味噌は天保13年、弘化3年、弘化4年の各下期のみに限られている。いずれも自家消費以上での仕入量とみられるが、どこに渡ったのか不明である。なお、酢と同様、幕末から販売がはじまった商品に粉糠がある。粉糠は御殿場酒店では天保期より販売がみられるが、小田原店においては文久2年下期が最初であり、以降、明治初期までほぼ継続して販売している。もっとも売高

実数の上では、粉糠も酢も他店に比して少量にとどまっている。焼酎は天保10年、天保11年、万延元年から慶応3年までは、買高と売高がおおよそ一致しているので、少なくともこの間の製造は殆どなされなかったか、僅かであったとみられる。

次に、酒と醤油の売高の推移を示したのが、〈図2. 小田原店の酒売高と醤油売高〉である。この図が示すように、天保期においては、醤油は概ね酒の販売量を上まわっている。安政期以降は酒売高が醤油売高を常時越え出ている。小田原店において醤油の買入はないので、売高量はすなわち醸造量であると考えてよい。醤油醸造と販売が、小田原店において見過ごすことのできない生産と営業の一つであったことが、ここから浮かび上がる。以下ではまず、醤油醸造に必要な大豆、小麦、塩の仕入れと販売を見ることにし、次に酒造高の推移を米の買高、売高、米価などの面から検討する。

醤油売高と共に、大豆、小麦、塩の買高の推移を示したのが〈図3. 小田原店の醤油売高と大豆・小麦・塩買高〉である。一貫して大豆が

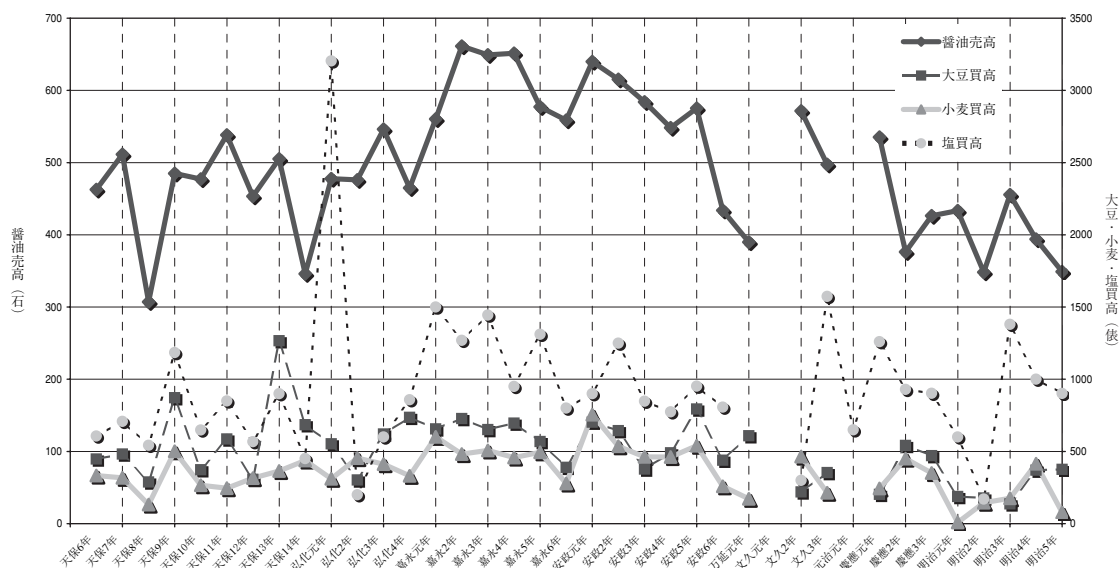


図3. 小田原店の醤油売高と大豆・小麦・塩買高

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

小麦よりやや多い買入量で推移している。塩は、大豆よりも多く仕入れている⁵¹。特に弘化元年に3,200俵を超えており、何故突出した塩の仕入れを行ったのか理由は不明である。小田原店では他店舗と異なり、若干の例外はあるものの、塩の販売は殆どない。塩の仕入れは醤油醸造以外の目的も考えられ、更に検討が必要である。嘉永から安政期にかけて、大豆、塩、小麦のすべてが比較的安定した推移をみせている。この時期は、醤油の売高が約550石から650石のあいだを維持している。しかし万延元年に一度落ち込み、慶応2年に対前年高で159石減少して以降、明治初期に至るまで低調な推移にとどまった。

次に酒造高を抽出したのが表6。小田原店酒造高実数である。弘化期から安政期にかけて、醸造高は安定している。殊に安政2年は616石6斗7升を数え、小田原店における最大の醸

造量となる。しかしながら、文久2年には272石4斗に落ちる。翌年ただちに回復するものの、慶応3年には86石7斗6升まで激減する。

次に、酒造高の推移を、酒の買高、売高の推移と重ね合わせたのが、図4。小田原店の酒造高・酒買高・酒売高である。また、小田原店における米買高、米売高、米相場(金換算)の推移と共に一石あたりの米の購入価格を買高と実数から算出して示したのが、図5。小田原店の米買高・米売高と米相場・一石価格である。天保期は幕府による酒造制限令が頻繁に出された時期である。天保7年の大飢饉は小田原においても深刻な打撃を与え、図5からも確認されるように、米相場の高騰を招いた。小田原店が仕入れた米の一石価格も、同様に騰貴している。天保7年8月12日「御配布廻り写し(幕府より酒造制限令の通達)⁵²」は、「諸国酒造之儀三分之一減石可致旨」が通達されたことを示しており、これらの影響により、小田原店の天保8年の酒造高は83石4斗に落ち込ん

⁵¹ 小田原店の醤油製法は不明だが、たとえば谷本雅之によれば、嘉永期のヤマサ醤油の製法では、小麦と大豆を1対1の割合で混合し、塩の分量は「上」では小麦、大豆と同量で、「上」より品質の劣る「次」ではそれを上まわる(谷本雅之(1990)、253頁)。

⁵² 御殿場市立図書館所蔵。

だ。安政2年における酒造高の多さは、安政元年の米の買高がこの時期の最大量3,880俵に達していることを受けての上昇であることが確認できる。と同時に、安政元年の米の売高は2,304俵余で、やはり大きな伸びを示している。仕入れた米は、例外的な年があるものの、およそ5割が売りにまわされ、5割が酒造用に使われたとみられる。なお嘉永元年は米の買高が突出している。米価に目立った変動はなく、なぜこの年に大量の米を仕入れたかは検討を要する。

元治元年（1864）上期の帳簿が残っていない

表6. 小田原店酒造高実数

会計年	石 斗 升	酒造制限令
天保6年	310 8 0	制限令
天保7年	340 4 0	
天保8年	83 4 0	制限令
天保9年	271 2 5	制限令
天保10年	182 7 2	制限令
天保11年	267 8 0	制限令
天保12年	318 4 9	制限令
天保13年	337 4 6	制限令
天保14年	291 1 7	
弘化元年	377 5 0	
弘化2年	410 3 6	
弘化3年	409 6 0	
弘化4年	410 2 0	制限令
嘉永元年	429 2 5	
嘉永2年	406 8 0	
嘉永3年	479 6 0	制限令
嘉永4年	454 7 0	
嘉永5年	460 2 0	
嘉永6年	504 1 0	制限令
安政元年	513 6 0	
安政2年	616 6 7	
安政3年	577 5 0	
安政4年	579 5 0	
安政5年	514 2 0	
安政6年	457 5 0	制限令
万延元年	443 3 0	制限令 9月 諸国鑑札高之三分之二造
文久元年		
文久2年	272 4 0	制限令
文久3年	430 1 0	制限令
元治元年		
慶応元年	559 7 0	
慶応2年	418 7 0	制限令 2月 諸国鑑札高之三分之一造
慶応3年	86 7 6	制限令 9月 諸国鑑札高之三分之一造
明治元年	245 1 0	
明治2年	304 6 0	
明治3年	259 6 0	
明治4年	409 5 0	
明治5年	409 9 0	

（出所）「小田原店勘定細見帳」（近江日野商人館所蔵）。柚木重三（1940）,「酒造制限令一覧年表」161-169頁。

（註）——は帳簿がないことを示す。

ため、この年の米の買高などについて確認できないが、翌慶応元年の酒造高は559石7斗である。したがって、元治元年の米の買高は相当量あったであろうと推測される。しかしながら、慶応3年に酒造高は最少量の86石7斗6升まで激減する。なおこの年は「酒造減石御改ニ付中間入り用割合出ス分」として35両2分2朱ト1匁4分の支出が計上されている。前年の慶応2年の米の買高は1,225俵2斗5升で、これは天保8年に次ぐ低さである。これほどに仕入れが激減したのは、米価の高騰によるものといえる。小田原店における一石あたりの米買入価格でみると、〈図5〉にみるように、慶応2年は前年より約2倍上昇したことがわかる。しかし売上合計金額も、前年より1.78倍増加している。その原因は、米や大豆の売上げ実数が増大したためである。酒造高を天保期から明治初期まで長期的に眺めてみると、酒造高と米の買高、売高はほぼ連動しており、既述したように、幕末、殊に慶応2年における米価の大騰貴を受けた年の酒造高は、わずか86石にまで落ち込まざるをえなかった。

明治4年には酒造高が上昇に転じる。しかし営業利益は、明治4年マイナス1,403両1分ト10匁7分2厘から、明治5年マイナス1,884両2分ト8匁8分6厘の大幅赤字（計算値）となる。収支の推移については次節で詳述する。

（2）収益費用勘定における収支の推移

天保6年から明治5年の収益費用勘定を示したのが〈表7. 小田原店収益費用勘定〉である⁵³。天保11年から弘化元年のあいだは、天保12年をのぞき営業利益はマイナスである。殊に天保13年はマイナス330両2分ト7匁6分（計算値）と大幅赤字であるが、これは酒樽の買入

⁵³ 天保4年および天保5年の現存する「小田原店勘定細見帳」は下期のみであるため、天保6年から数表化した。〈表8. 小田原店資産負債勘定〉についても同様である。

れ48両余と醤油樽の買入れ86両余の固定設備への支出が原因とみられる。この固定設備への投資が天保後期から嘉永期にかけての酒造高、醤油醸造高の上昇へと繋がる一因であると考えら

れる。

嘉永5年に3,817両1分ト5匁4分8厘であった売上高は、嘉永6年に5,515両3分ト8匁3分となり大きな飛躍をみせた。これは米の

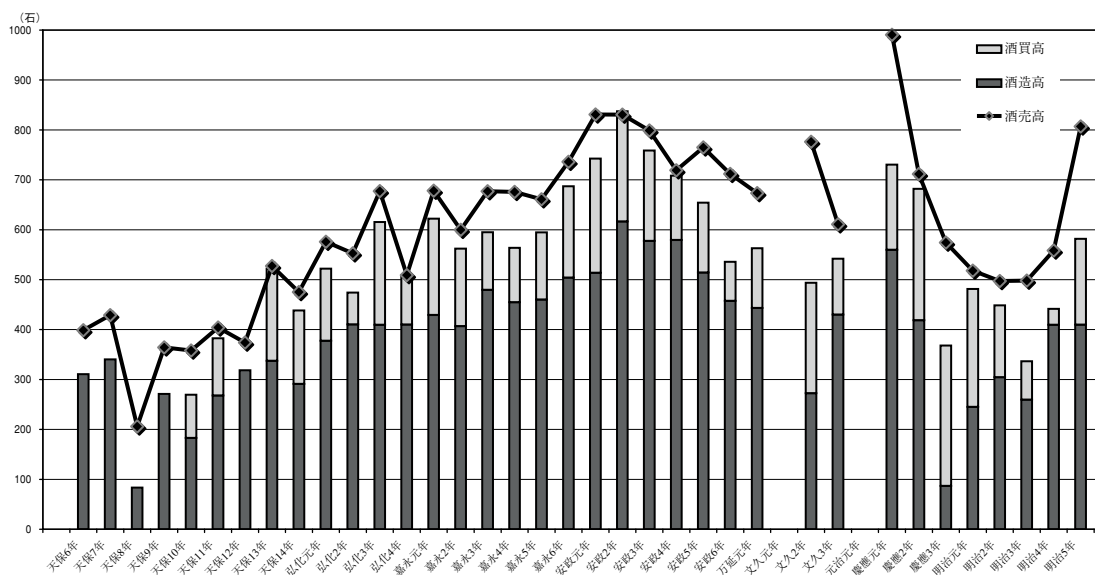


図4．小田原店の酒造高・酒買高・酒売高

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

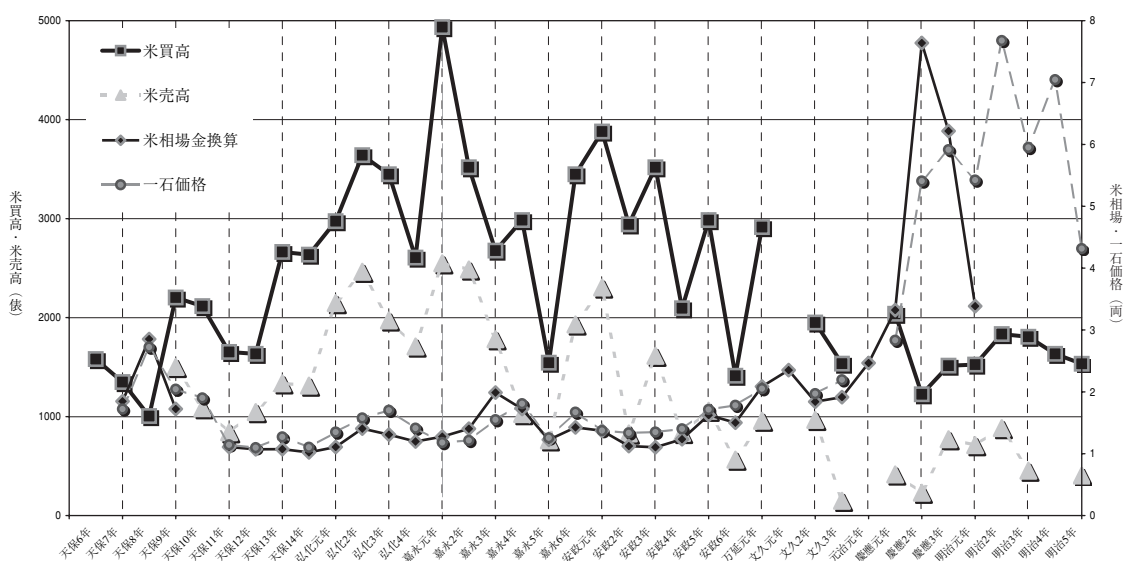


図5．小田原店の米買高・米売高と米相場・一石価格

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并為替日々相場帳』2 (1916)、附表。

(註) 『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并為替日々相場帳』附表の米相場は銀表記であるため、同表の金相場平均値から金に換算し、米相場平均値とした。

表 7. 小田原店収益費用勘定

会計年	①期首在庫＋仕入合計		②期末在庫＋自家消費合計		③売上原価 (= ①－②)		④売上高		⑤売上総利益 (= ④－③)		⑥費用合計		⑦営業利益 (= ⑤－⑥)	
	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.	両. 分. 朱	匁.
天保6年	1,925. 0. 0	129.8 4	652. 3. 0	6. 3 9	1,272. 1. 0	123.4 5	1,740. 2. 0	11.5 0	466. 1. 0	8.0 5	414. 1. 3	1.4 2	51. 3. 2	2.8 8
天保7年	2,100. 3. 2	168.9 2	785. 1. 3	88.9 2	1,315. 1. 3	80.0 0	1,876. 3. 0	1.2 5	560. 0. 0	0.0 0	529. 3. 0	12.4 8	30. 0. 0	2.5 2
天保8年	2,344. 0. 2	165.7 0	756. 0. 0	24.6 4	1,590. 1. 0	13.5 6	1,979. 1. 0	12.3 1	388. 3. 0	13.7 5	340. 1. 0	13.3 8	48. 2. 0	0.3 7
天保9年	3,638. 3. 2	380.5 6	1,058. 2. 2	102.1 1	2,580. 1. 0	278.4 5	3,667. 1. 0	3.2 2	1,082. 1. 0	9.7 7	449. 0. 0	11.6 0	633. 0. 0	13.1 7
天保10年	3,481. 1. 3	151.2 0	1,061. 0. 0	104.3 7	2,421. 0. 0	13.0 8	3,175. 2. 0	5.1 9	754. 1. 0	7.1 1	489. 3. 0	3.6 1	264. 2. 0	3.5 0
天保11年	2,584. 0. 0	151.4 7	983. 0. 0	81.7 6	1,601. 0. 0	69.7 1	2,000. 3. 0	0.1 4	398. 2. 0	5.4 3	494. 0. 3	1.7 7	△95. 2. 0	7.5 9
天保12年	2,129. 0. 0	128.5 5	733. 3. 0	50.3 9	1,395. 1. 0	78.1 6	1,902. 3. 0	4.8 9	506. 1. 0	1.7 3	464. 0. 2	1.4 0	42. 0. 2	0.3 3
天保13年	3,210. 3. 0	3.9 5	796. 2. 0	13.1 0	2,414. 0. 0	5.8 5	2,628. 3. 0	10.6 8	214. 3. 0	4.8 3	545. 1. 0	12.4 3	△330. 2. 0	7.6 0
天保14年	2,776. 1. 0	3.7 9	963. 2. 0	14.6 0	1,812. 2. 0	4.1 9	2,184. 0. 0	2.2 7	371. 1. 0	13.0 8	396. 1. 0	5.1 5	△24. 3. 0	7.0 7
弘化元年	3,487. 2. 0	1.0 8	828. 3. 0	11.7 7	2,658. 2. 0	4.3 3	3,149. 2. 0	12.2 5	491. 0. 0	7.9 2	508. 0. 0	4.9 0	△16. 3. 0	12.9 8
弘化2年	3,752. 3. 0	14.4 3	724. 0. 0	3.0 0	3,028. 3. 0	11.4 3	3,763. 0. 0	5.3 2	734. 0. 0	8.8 9	560. 1. 0	0.4 7	173. 3. 0	8.5 1
弘化3年	4,116. 0. 0	64.3 3	812. 2. 0	4.5 3	3,304. 1. 0	14.8 0	4,208. 0. 0	0.8 4	903. 2. 0	1.0 4	705. 3. 0	7.5 3	197. 2. 0	8.4 2
弘化4年	3,101. 3. 0	5.3 5	742. 2. 0	1.9 3	2,359. 1. 0	3.4 2	3,088. 1. 0	0.3 3	728. 3. 0	11.9 3	481. 3. 0	5.9 1	247. 0. 0	6.0 2
嘉永元年	4,348. 0. 0	4.6 9	1,185. 2. 0	6.0 2	3,162. 1. 0	13.6 7	4,000. 1. 0	1.9 0	837. 3. 0	3.2 3	623. 2. 0	2.6 6	214. 1. 0	0.5 7
嘉永2年	4,065. 3. 0	1.7 9	1,296. 1. 0	1.5 8	2,769. 2. 0	0.2 1	3,694. 1. 0	3.1 1	924. 3. 0	3.0 0	603. 1. 0	3.6 6	321. 1. 0	14.3 4
嘉永3年	4,121. 2. 0	12.4 7	1,158. 3. 0	2.8 4	2,962. 3. 0	9.6 3	4,263. 2. 0	3.6 3	1,307. 2. 0	9.0 0	585. 0. 0	4.7 2	722. 2. 0	4.2 8
嘉永4年	4,472. 3. 0	9.6 3	1,499. 2. 0	2.0 4	2,973. 1. 0	7.5 9	4,468. 1. 0	5.8 6	1,495. 0. 0	1.2 7	789. 3. 0	11.4 8	785. 0. 0	4.7 9
嘉永5年	3,344. 3. 0	93.7 4	1,191. 1. 0	8.1 2	2,154. 3. 0	10.6 2	3,817. 1. 0	8.4 8	1,662. 1. 0	9.8 6	658. 2. 0	13.3 8	1,003. 2. 0	11.4 8
嘉永6年	4,504. 1. 0	87.4 2	970. 3. 0	85.8 2	3,533. 2. 0	1.6 0	5,515. 3. 0	8.3 0	1,982. 1. 0	6.7 0	764. 0. 0	9.8 4	1,218. 0. 0	11.8 6
安政元年	4,598. 2. 0	61.7 9	1,088. 1. 0	5.9 7	3,511. 0. 0	10.8 2	4,573. 3. 0	12.4 0	1,062. 3. 0	1.5 8	772. 1. 0	9.2 1	290. 1. 0	7.3 7
安政2年	3,918. 2. 0	55.3 1	1,181. 0. 0	14.0 8	2,738. 0. 0	11.2 3	4,040. 0. 0	12.0 6	1,302. 0. 0	0.8 3	835. 3. 0	0.3 2	466. 1. 0	0.5 1
安政3年	4,041. 0. 0	86.2 9	1,188. 1. 0	14.3 1	2,853. 3. 0	11.9 8	3,803. 0. 0	11.2 3	949. 0. 0	14.2 5	745. 2. 0	12.5 3	203. 2. 0	1.7 2
安政4年	3,301. 0. 0	41.4 7	1,284. 0. 0	11.3 8	2,017. 0. 0	32.0 9	3,535. 0. 0	2.3 1	1,517. 2. 0	0.2 2	739. 2. 0	3.0 7	777. 3. 0	12.1 5
安政5年	4,530. 1. 0	72.6 5	1,565. 1. 0	7.1 9	2,966. 0. 0	5.4 6	4,189. 0. 0	14.7 2	1,223. 0. 0	9.2 6	851. 1. 0	8.8 9	371. 3. 0	0.3 7
安政6年	3,309. 1. 0	14.3 1	1,043. 0. 0	10.7 7	2,266. 1. 0	3.5 4	3,640. 2. 0	11.4 0	1,374. 1. 0	7.8 6	687. 1. 0	7.6 1	687. 0. 0	0.2 5
万延元年	4,435. 0. 0	14.7 3	1,596. 1. 0	14.4 9	2,838. 3. 0	0.2 4	4,059. 2. 0	13.9 0	1,220. 3. 0	13.6 6	895. 2. 0	9.0 2	325. 1. 0	4.6 4
文久元年														
文久2年	3,873. 0. 0	5.3 8	1,243. 0. 0	7.1 9	2,629. 3. 0	13.1 9	4,601. 0. 0	13.3 4	1,971. 0. 0	14.9 5	925. 2. 0	4.0 0	1,045. 2. 0	10.9 5
文久3年	3,770. 3. 0	13.9 9	1,208. 2. 0	11.5 8	2,562. 1. 0	2.4 1	4,498. 3. 0	4.1 3	1,936. 2. 0	1.7 2	990. 3. 0	11.1 8	945. 2. 0	5.5 4
元治元年														
慶応元年	6,217. 2. 0	58.0 6	2,358. 3. 0	6.6 4	3,858. 3. 0	51.4 2	7,262. 1. 0	8.5 0	3,402. 3. 0	2.0 8	1,819. 0. 0	3.9 5	1,583. 2. 0	13.1 3
慶応2年	8,753. 2. 0	9.0 8	3,856. 1. 0	9.8 7	4,897. 0. 0	14.2 1	7,665. 0. 0	13.0 7	2,767. 3. 0	13.8 6	2,074. 1. 0	12.9 7	693. 2. 0	0.8 9
慶応3年	14,556. 1. 0	6.1 8	3,502. 2. 0	1.7 1	11,053. 3. 0	4.4 7	13,640. 2. 0	10.6 1	2,586. 1. 0	6.1 4	1,925. 0. 0	6.2 9	661. 0. 0	14.8 5
明治元年	9,461. 0. 0	10.2 4	3,486. 1. 0	13.2 5	5,974. 2. 0	12.9 9	9,996. 0. 0	1.4 2	4,021. 1. 0	3.4 3	1,984. 1. 0	12.2 4	2,036. 3. 0	6.1 9
明治2年	11,391. 2. 0	0.7 9	3,775. 3. 0	3.6 7	7,615. 2. 0	12.1 2	10,574. 3. 0	4.5 6	2,959. 0. 0	7.4 4	2,001. 2. 0	11.7 9	957. 1. 0	10.6 5
明治3年	11,316. 1. 0	4.6 3	4,612. 2. 0	54.9 4	6,702. 3. 0	9.6 9	10,485. 1. 0	2.9 2	3,782. 1. 0	8.2 3	2,209. 0. 0	11.7 0	1,573. 0. 0	11.5 3
明治4年	12,476. 2. 0	0.3 9	5,199. 2. 0	10.5 0	7,276. 3. 0	4.8 9	9,026. 0. 0	4.6 3	1,749. 0. 0	14.7 4	3,152. 2. 0	10.4 6	△1,403. 1. 0	10.7 2
明治5年	10,003. 1. 0	74.9 5	3,099. 0. 0	14.7 2	6,904. 3. 0	60.2 3	7,759. 3. 0	2.4 5	854. 0. 0	2.2 2	2,738. 2. 0	11.0 8	△1,884. 2. 0	8.8 6

(出所)「小田原店勘定細目帳」(近江日野商人館所蔵)。

(注) △はマイナスを示す。原史料に数値が記されていない場合でも、算出可能である場合は計算のうえに記載した。――は帳簿がないことを示す。

売上げが、760俵から1,931俵に増えたことによる。

売上高は、慶応2年の7,665両ト13匁7厘から慶応3年の13,640両2分ト10匁6分1厘に上昇している。この間を売高実数で比較するとおおよそ米3.3倍、酒0.8倍、醤油1.1倍、焼酎0.5倍、大豆17.2倍となっているため、売上金の上昇は、大豆の売高が大幅に伸びたことに起因する。

明治初期においては急激な売上高の変化がみられ、明治3年10,485両1分ト2匁9分2厘→明治4年9,026両ト4匁6分3厘→明治5年7,759両3分ト2匁4分5厘と下降している。これを酒売上石高でみると、明治3年498石6升4合→明治4年558石3斗1升2合→明治5年807石1升8合と上昇しているため、物価変動の影響を強く受けた結果であると推測できる。

次に費用合計をみると、文久3年990両3分ト11匁1分8厘から慶応元年には1,819両ト3匁9分5厘へと倍増する。更にその内訳をみると、諸入用、飯米、薪代買入れが文久2年以降上昇する。酒および醤油の樽買入れの実数は不明だが、慶応元年は酒樽153両余、醤油樽300両余で、文久3年より共に2倍以上となっている。明治5年の酒樽買入れは370両にまでのぼった。飯米でみると、文久3年に95俵84両であったのが、慶応2年に105俵2分5厘で249両余となっており、激しい米価高騰がみてとれる。更に費用合計をみると、明治3年の2,209両ト11匁7分から明治4年には3,152両2分ト10匁4分6厘へと千両近く増えているが、その内訳でみると、小遣入用147両余→275両余、飯米他395両余→468両余、普請入用69両余→108両余、酒樽買入91両余→192両余、醤油樽72両余→172両余、店の者8人154両余→7人327両余となっている。あらゆる諸物価が高騰した影響を如実に受けている。

なお、奉公人の人数を「給金引当」における「店之者」あるいは「若者」の人数表記から抽

出し、平均値を出していくと、天保期5.8人、弘化期5.6人、嘉永期7.7人、安政期9.8人、万延～元治期7.0人、慶応期9.5人、明治初期8.2人となり、安政期をピークとして平均7.5人ほどが従事していたとみられる。天保期から安政期にかけての人員増加は、酒造高および醤油醸造高の増加の推移とおおよそ一致している。

5 小田原店と本家・本店間の資金関係

以下ではまず、小田原店における資産負債勘定の推移の変化とその要因を探る。次に、資産負債勘定の中で記述されている元手金、株金、利息、益金の流れを分析する。前章までは、小田原店の経営の内部に焦点を絞ったが、本章では小田原店の「勘定細見帳」における資金の分析を行い、本家や本店とのあいだの資金の流れという面から捉える。このことにより、出店の一つである小田原店が、山中家においてどのような位置づけであったかも検討する。

(1) 資産負債勘定の推移

天保6年から明治5年の小田原店の資産負債勘定を示したのが表8「小田原店資産負債勘定」である。この期間を純資産の推移から大きく三つに分け、資産と負債の変化を純資産の推移から検討する。

天保10年から弘化元年は純資産低減期である。その要因として、米有物や金融資産の減少があげられる。たとえば、天保11年に153両あった米（新内米・新白米・古白米）は、天保12年には37両（御蔵米・同白米）に落ち込んでいる。また、天保9年157両の本店への貸金は天保10年には106両となり、天保12年には僅か1両となった。

弘化から文久期は安定期で資産、負債共に緩やかな増減を示している。ただし負債額が、弘化4年809両3分ト13匁3分から翌嘉永元年には1,413両1分ト13匁4分3厘に、また安政4

年1,401両ト1匁2分8厘から翌安政5年には2,075両3分ト9匁2分1厘と、前年より500両ほど増加している年がある。その原因は、嘉永元年や安政5年では本店からの借入金が増えたためとみられる。なお、嘉永元年はマイナス2両2分ト2匁5分と、僅かではあるが「ふ足損」が記され、この年はじめて純資産が赤字になった。

一方、慶応期以降の純資産は急増、急減を繰

り返している。慶応元年の資産合計は、文久3年の約2倍の4,054両1分ト1匁2厘になっている。これは金融資産の増加に起因している。その主要因は、店有金銭が130両2朱ト424貫485文から281両2分ト139貫950文に増え、助郷役所用達金700両が加わったためである。翌慶応2年に、資産合計は更に約900両増加する。このときの伸びは金融資産ではなく、現物資産の増加に起因する。古酒は66両余(20石)から794

表8. 小田原店資産負債勘定

会計年	①現物資産		②金融資産		③資産合計 (=①+②)		④負債合計		⑤純資産(過上) (=③-④)	
	両.分.朱	匁	両.分.朱	匁	両.分.朱	匁	両.分.朱	匁	両.分.朱	匁
天保6年	608.1.0	95.81	223.3.0	4.85	833.2.0	10.66	625.2.2	20.22	208.0.0	12.94
天保7年	713.0.3	77.50	175.3.0	6.76	890.0.3	9.26	771.1.0	9.56	118.3.0	10.95
天保8年	673.2.0	71.18	576.3.0	17.51	1,251.2.0	13.69	941.3.0	12.67	309.3.0	0.12
天保9年	993.0.2	95.30	406.1.0	9.70	1,401.0.2	0.00	898.2.0	2.16	502.2.0	5.34
天保10年	996.0.0	94.71	260.2.0	5.09	1,256.1.3	103.55	1,185.3.0	14.49	72.0.0	10.31
天保11年	943.0.0	68.06	163.1.0	14.61	1,107.2.0	7.67	1,083.3.0	0.42	23.3.0	7.25
天保12年	700.0.0	49.42	171.0.0	0.62	871.3.0	5.04	854.0.0	8.66	17.2.0	11.38
天保13年	742.3.0	83.71	219.1.0	6.96	963.2.0	0.67	935.0.0	12.33	28.1.0	3.34
天保14年	934.0.0	88.71	162.3.0	1.38	1,098.1.0	0.09	1,039.1.0	12.85	58.3.0	2.24
弘化元年	776.1.0	112.65	223.3.0	7.61	1,002.0.0	0.26	941.3.0	9.14	60.0.0	6.12
弘化2年	666.3.0	0.13	447.2.0	10.23	1,114.1.0	10.36	762.1.0	7.92	352.0.0	2.44
弘化3年	729.3.0	63.23	299.0.0	12.53	1,030.0.0	0.76	887.0.0	2.21	143.3.0	13.55
弘化4年	689.2.0	93.74	375.1.0	7.79	1,066.1.0	11.53	809.3.0	13.30	256.1.0	13.23
嘉永元年	1,108.3.0	1,018.58	285.0.0	12.35	1,410.3.0	10.93	1,413.1.0	13.43	△2.2.0	2.50
嘉永2年	1,236.3.4	458.80	287.0.0	5.61	1,531.1.0	14.41	1,266.1.0	3.46	265.0.0	10.95
嘉永3年	1,108.0.0	11.83	231.3.0	3.66	1,340.0.0	0.49	863.1.0	7.12	476.2.0	8.37
嘉永4年	1,415.2.0	14.80	414.1.0	12.13	1,830.0.0	11.93	1,328.1.0	3.04	501.3.0	8.89
嘉永5年	1,227.1.0	3.80	397.0.0	12.62	1,624.2.0	1.42	1,279.1.0	0.00	345.1.0	1.42
嘉永6年	882.2.0	13.82	550.1.0	7.55	1,433.0.0	6.37	1,316.1.0	2.12	116.3.0	4.25
安政元年	1,016.2.0	4.47	359.0.0	12.20	1,375.3.0	1.67	969.0.0	6.04	406.2.0	10.63
安政2年	1,106.1.0	5.64	470.3.0	11.82	1,577.1.0	2.46	1,395.0.0	7.18	182.0.0	10.28
安政3年	1,121.3.0	5.96	554.0.0	9.57	1,676.0.0	0.53	1,432.3.0	13.58	243.0.0	1.95
安政4年	1,206.0.0	8.96	552.0.0	4.06	1,758.0.0	13.02	1,401.0.0	1.28	357.0.0	11.74
安政5年	1,479.1.0	7.04	708.1.0	12.90	2,187.2.0	19.94	2,075.3.0	9.21	111.3.0	10.73
安政6年	961.1.0	3.91	704.1.0	14.51	1,665.3.0	3.42	1,508.2.0	14.52	157.0.0	3.90
万延元年	1,596.1.0	14.49	787.3.0	8.86	2,384.1.0	8.35	2,003.2.0	9.22	380.2.0	14.13
文久元年										
文久2年	1,243.0.0	7.19	648.3.0	8.56	1,892.0.0	0.75	1,777.0.0	14.65	114.3.0	1.10
文久3年	1,208.2.0	11.58	854.0.0	10.99	2,062.3.0	7.57	1,612.3.0	0.91	450.0.0	6.66
元治元年										
慶応元年	1,339.2.0	61,161.64	1,695.1.0	9.38	4,054.1.0	1.02	2,705.1.0	14.55	1,348.3.0	1.47
慶応2年	3,856.1.0	9.87	1,098.3.0	3.66	4,955.0.0	13.53	4,374.2.0	2.35	580.2.0	11.18
慶応3年	3,502.2.0	1.71	1,268.1.0	0.86	4,770.3.0	2.57	3,198.2.2	23.84	1,571.3.0	1.23
慶応4年	3,486.1.0	13.25	1,421.1.0	14.42	4,907.3.0	12.67	3,861.0.0	0.16	1,046.3.0	12.51
明治2年	3,775.3.0	3.67	1,310.1.0	11.45	5,086.1.0	0.12	4,067.1.0	0.72	1,018.3.0	14.40
明治3年	4,612.2.0	54.93	2,018.2.0	3.19	6,640.0.0	13.12	5,060.2.0	3.07	1,579.2.0	10.05
明治4年	5,199.2.0	10.70	1,619.0.0	4.36	6,818.3.0	0.06	5,899.0.0	2.02	919.2.0	13.04
明治5年	3,099.0.0	14.72	1,494.2.0	8.87	4,593.3.0	8.59	5,614.2.0	15.86	△1,020.3.0	7.27

(出所)「小田原店細見勘定帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) △はマイナスを示す。史料に数値が記されていない場合でも、算出可能である場合は計算のうえ記載した。——は帳簿がないことを示す。

明治3年は①+②=③にならないが、原史料の数値をそれぞれ記載した。

両余(135石)に、御殿場酒店からの買入油が105両(30駄)から240両(40駄)に激増したことが大きい。ただし、実数では10駄の上昇でしかない。醤油諸味は慶応元年の57貫余から慶応2年の1,428両余に急増している。しかし、やはり実数では359石から400石の僅かな増量でなく、物量そのものの急増よりも、幕末期における物価高騰の影響を受けたためといえる。

負債では、慶応元年から慶応2年にかけて負債額がほぼ2倍になっているが、「本店差引尻不足かり」が1,828両余から2,875両余になり、また慶応2年には御殿場酒店から「酒代差引かり」として467両余が計上されていることが原因とみられる。明治2年の負債4,067両1分ト7分2厘が、翌明治3年に5,060両2分ト3匁7厘と増えたのは、「本店差引ふ足かり」が2,706両余から3,357両余に増えたこと、岩原村庄兵衛からの借金が、明治2年の158両(大豆代)から、翌明治3年は400両(切手代)に上がったこと、「蔵のものの給金預り」が50両(3人)から91両余(5人)に増えたことに起因する。更に、明治3年より翌明治4年に負債が839両余増えたのは、「本店差引不足かり」が3,936両余になり、庄兵衛からの切手米預りが550両に増え、他に「醤油其外酒下落ニ付損金ニ見候分引」として新たに200両計上されていることが原因である。このように、幕末から明治初期にかけての負債額の増加は、本店との「差引不足借り」が年々増大し、近隣商人からの借金も増えたことが主たる要因の一つである。

なお、純資産は明治5年に1,020両3分ト7匁2分7厘の大幅赤字となる。これは前年より資産が2,000両以上も落ち込んだためであり、たとえば酒の在庫が約4分の1以下に減少している。

(2) 本家・本店間の資金の流れ

①元手金・株金

日野本家の決算簿の中に宝暦7年(1757)か

ら弘化3年の「勘定目録」がある⁵⁴。「勘定目録」は帳簿の前半に本店の資産負債勘定、後半に日野本家の資産負債勘定を記載し、本店および本家の各純資産を算出したあとで、両者の純資産を合算し、最後に対前年増減額を算出するという構成となっている⁵⁵。

⌘ 本店が作成する決算簿は「⌘ 店勘定細見帳」であり、このなかの「正金之覚」の部に各出店の株金や元手金が記載されている。

以下は、本家、本店、小田原店の各勘定帳における、弘化3年の小田原店の株金および元手金についての記述部分である⁵⁶。

「弘化三年午ノ勘定」

⊕ 店株金 300両

同店元手金 金500両

「⌘ 店勘定細見帳」(正金之覚)

⊕ 店株金分 金300両

同店元手金分 金500両

「小田原店勘定細見帳」(内)

元手金 金500両

小田原店の株金300両および元手金500両は、本家の勘定帳である「弘化三年午ノ勘定」において、本店の資産として計上されている。また、本店の「御殿場本店勘定細見帳」の「正金之覚」においても同額を確認できる。元手金は「小田原店勘定細見帳」では負債として計上されており、本店からの資金融資となっているこ

⁵⁴ 天保2年から弘化3年までは「勘定」。

⁵⁵ 本家には「本家勘定目録控」および「本家勘定細見目録」という帳簿もある(近江日野商人館所蔵)。「本家勘定目録控」では、まず「覚」で資産、負債を記し、「徳用物覚」で収益を、「損金物覚」で費用を記す。次に「目録之覚」の部で、同じ年の「勘定目録」と同内容を記載している。すなわち「勘定目録」と、「本家勘定目録控」の「目録之覚」の記載内容は一致している。

⁵⁶ 弘化元年のように株金が「土臺金」と記される年もある。「本家勘定細見目録」では文政元年まで⊕店の土臺金、文政2年より小田原店の土臺金が計上される。元手金は文政8年200両、文政9年300両、天保4年以降500両となる。

表9. 利息

会計年	小田原店支払利息			本店受取利息			本家受取利息		
	両.分.朱	匁.		両.分.朱	匁.		両.分.朱	匁.	
弘化元年	82. 8. 0	6. 3 7	本家へ払分也				82. 2. 1	0. 0 0	⑤店利足ニ取分
弘化2年	58. 3. 0	13. 9 6	本家へ上納之分				59. 0. 0	0. 0 0	⑤店り足入
弘化3年	76. 1. 0	9. 7 5	払分				76. 1. 2	0. 0 0	⑤店り足入
弘化4年	64. 1. 0	11. 8 6	忬へ拂分なり	64. 1. 0	11. 8 6	⑤利取	64. 1. 2	0. 0 0	⑤店り足入
嘉永元年	90. 2. 0	10. 3 1	本店へ払分なり	90. 2. 0	10. 3 1	⑤利足取	90. 2. 2	0. 0 0	⑤店り足入
嘉永2年	80. 3. 0	13. 4 5	忬へ拂分	85. 1. 0	5. 1 1	⑤店利足分取	85. 1. 0	0. 0 0	⑤店り足入

(出所)「小田原店勘定細見帳」「店勘定細見帳」「本家勘定目録控」(近江日野商人館所蔵)。

(註) 空白は原史料に数値の記載がないことを示す。

とがわかる。一方「小田原店勘定細見帳」では株金が負債として計上されていない。弘化3年に限らず「小田原店勘定細見帳」では、元手金の記載はあるが株金の記載はない。株金は酒造株と推測されるが、小田原店の酒造株はあくまで本店が保有する形を一貫してとっていることが、以上の史料により確認できる。「**田** 酒店要用控」において、「一 右酒株借受去ル十月より彼地江出店相始メ申候、然ル處右店之儀末永ク相続仕候ハ、永代 忬 本店之附店と仕置相續可致事」とあるように、小田原店の前身である**田** 店は、本店支配人が酒株諸道具などを関本村伝蔵から借受けて事業を開始した店で、「永代 忬 本店之附店」と位置づけられている。したがって、酒造株をめぐる本店と**田** 店の関係性は、小田原移設後も継続していることがわかる。なお、御殿場酒店は小田原店と異なり、「御殿場酒店勘定細見帳」の「内」に、株金800両が負債として計上され、本店から資本融資を受ける関係となっている。

②利息

小田原店は酒造元手金を本店から融資されているが、他に本店とのあいだで商品や金銭の貸借があり、それらに対して利息が発生していたとみられる。小田原店の支払利息合計金額は「小田原店勘定細見帳」に記載されている。小田原店、本店、本家の各勘定帳における、小田原店の利息の項を、弘化元年から嘉永2年まで

対照比較したのが〈表9. 利息〉である。「小田原店勘定細見帳」における利息合計の項では、支払先が弘化元年、弘化2年のように「本家へ払分」と記載されている場合もあれば、嘉永元年およびそれ以降のように「本店へ払分なり」とある場合もある。そこで利息合計金額が、本店および本家の勘定帳にどのように記載されているかを検討する。

小田原店からの利息の記述は、弘化元年から弘化3年は本店の「店勘定細見帳」の「損徳覚」には記載されていないが、「本家勘定目録控」の「徳用物覚」に収益として計上されている⁵⁷。また、弘化4年から嘉永2年は「店勘定細見帳」にも、「本家勘定目録」にも共に記載がある。したがって、少なくとも嘉永2年までは小田原店の利息は、本店を経由して本家に付け替えられていたと推測できる。

③為登金

為登金とは、小田原店の益金であると考えられるが、〈表10. 為登金〉で明らかのように、為登金が計上されている年は、天保7年、天保9年、天保13年、天保14年、慶応2年以降をのぞき、純資産のはほぼ全額が為登金となっている。「小田原店勘定細見帳」で為登金がどこに宛てられているかを見ると、天保7年、天保8

⁵⁷ 文化10年から天保4年までの御殿場酒店からの益金上納については、賀川隆行(2005)、43頁の指摘がある。

年は本店が受け取り先になっている。一方、天保10年、天保12年、天保13年、天保14年、弘化4年、嘉永4年は「本家へ」と記されている。このように「小田原店勘定細見帳」の記述を見る限り、為登先は一定していない。

更に「店勘定細見帳」の「損得之覚」の部における小田原店からの為登についての記載を見ると、安政3年～安政6年、文久2年、元治元

年では「㊤店為登分」の付記を確認できる。一方、「本家勘定目録控」では、「小田原店勘定細見帳」で為登金を本家へと記された年においても、それ以外の年においても、為登金についての記述がない⁵⁸。なお、御殿場酒店からの為登については、史料の現存が確認できる文化10年から天保5年および天保7年、弘化元年から嘉永2年、万延元年から文久元年の「本家勘定細見帳」において、その収益について記述される「徳用物覚」の部に、「㊤店賣だし」「㊤店徳」などと金額が記載されている。その金額は、同じ年の「御殿場酒店勘定細見帳」で記載された純資産額とほぼ同額である。御殿場酒店では純資産のほぼ全額を為登金として、本家に上納していることが確認できる。

そもそも小田原店や本店の勘定帳は本家へ宛てられたものである。その本家の勘定帳では、小田原店からの為登金の記載がほぼみられない。ということは、「小田原店勘定細見帳」では計算値として為登金額を算出し、本店勘定帳にも記載されはするものの、実際には本家に渡っていない可能性が考えられる。御殿場酒店と異なり、為登金として「小田原店勘定細見帳」に計上された益金は、必ずしも本家への上納を意味しているわけではないのである。

たとえば嘉永4年の「小田原店勘定細見帳」では500両を「本家へ為登ニ成ル割合金也」とし、そのうち100両を「用意金ニのけ置ク」とする。そして最後に「引メ金四百両也、此分人数割ニスル」とある。同年の純資産、すなわち過上は501両3分ト8匁8分9厘であり、為登金は後述するように、文久2年までは過上のほぼ全額をあてているので、この年の為登金の割合は500両とされた。そのようにして500両を計上しているものの、そこから100両を用意金の

表10. 為登金

会計年	為登金	為登率	主法金	主法率
	両.分.朱	%	両.分.朱	%
天保6年				
天保7年	50. 0. 0	42.0		
天保8年	300. 0. 0	96.8		
天保9年	400. 0. 0	79.5		
天保10年	72. 0. 0	99.7		
天保11年	23. 3. 0	99.4		
天保12年	17. 2. 0	98.9		
天保13年	8. 1. 0	29.1		
天保14年	30. 0. 0	51.0		
弘化元年	60. 0. 0	99.8		
弘化2年	300. 0. 0	85.2		
弘化3年	140. 0. 0	97.2		
弘化4年	250. 0. 0	97.4		
嘉永元年				
嘉永2年				
嘉永3年				
嘉永4年	500. 0. 0	99.6		
嘉永5年				
嘉永6年	116. 1. 0	99.5		
安政元年				
安政2年				
安政3年	243. 0. 0	99.9		
安政4年	350. 0. 0	97.9		
安政5年				
安政6年				
万延元年				
文久元年				
文久2年	110. 0. 0	95.8		
文久3年				
元治元年				
慶応元年				
慶応2年	435. 0. 0	74.9	145. 0. 0	24.9
慶応3年	1,179. 0. 0	75.0	392. 0. 0	24.9
明治元年	780. 0. 0	74.5	260. 0. 0	24.8
明治2年	763. 2. 0	74.9	254. 2. 0	24.9
明治3年	1,184. 0. 0	74.9	394. 3. 0	24.9
明治4年	689. 0. 0	74.9	219. 3. 0	23.8
明治5年				

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) 為登率=(為登金/純資産) %

主法率=(主法金/純資産) %

——は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。

⁵⁸ 例外は、文久2年だが「本家勘定目録控」の「徳用物覚」で360両が「㊤賣出し」とされ、内60両が「用意のけ給金帳へ入」で、引メ300両が「四人給金帳へ入」とされている。

ため差し引いて、残る400両を人数で割るというのだから、上納金としての為登金は実質的には残らないことになる⁵⁹。

文久2年までは、純資産のほぼ全額を為登金として算出していたが、慶応2年以降は75%となっている。残る25%は主法金にあてられている。文久2年までとそれ以降とで、為登金の比率に変化が見られるのは、文久2年に行われた山中家の家政改革のなかで、奉公人に対する報奨金の支給に関する主法制度が確立したためといえる。たとえば、慶応2年には145両が「主法分本店へ預け」、慶応3年には392両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法ニ除分」とあり、これらは純資産の25%に相当する。すなわち、文久期の家政改革以降、益金の75%を為登金、25%を主法金として計上するようになった。

慶応2年に打撃を受けた酒造高は、明治4年以降400石台に回復し、明治5年もほぼ同じ石高を維持するが、その明治5年の「小田原店勘定細見帳」では純資産がマイナス1,020両余、営業利益はマイナス1,884両余と、決定的な崩壊を見せる。したがってこの年は当然ながら、為登金および主法金を計上することはできない。このことは、主法制度の実施を記述した文久2年9月「忸改格主法変革堅固手段控⁶⁰」からも確認できる。同史料は各店舗の為登金および主法金を年ごとに記した帳簿である。そのうち「壬申年主法被下分」（明治5年）の小田原店についての記述をみると、「㊥無皆」とされ、為登金および主法金は共に計上されていない。またその前に、「㊥店申八月金千両也不足勘定ニ付、主法残金之内ニ貳分五厘分損分助合

致遣ス」とあり、明治5年の純資産をマイナス1,000両としたうえで、その25%分は主法繰越合計金額から補填されたことがわかる⁶¹。この明治5年上期で小田原店および御殿場酒店の「勘定細見帳」は途絶え、本店、伊豆店、沼津店の勘定帳も明治5年作成分で一旦途切れる。再び史料が確認できるのは、本店、出店共に明治9年2月作成分からであり、且つ、金額記載は両表記から円表記に移る。純資産、営業利益共に、大幅なマイナス値を計上する明治5年をもって、近世的経営の終点を迎えるのである。

6. おわりに

山中兵右衛門家の決算帳簿である各店舗の「勘定細見帳」に記載された取扱い品から、出店の経営実態を解明する試みは従来の研究になかったが、本稿では小田原店に焦点を絞り込み、天保期から明治初期における「小田原店勘定細見帳」を検討した。その結果、以下の点が明らかになった。「小田原店勘定細見帳」は複式帳簿の形式をほぼとりつつ、中間決算と本決算を行っている。また、酒だけでなく醤油の醸造、販売を行い、酒や醤油の原料や、穀類などを中心とする商品の仕入れと販売を行っている。特に米は、酒造の原料調達および自家消費用として購入するのみならず、米そのものを大量に販売していることがわかった。すなわち、小田原店は製造業と商業の両業に従事していることが鮮明になった。弘化から安政期は安定した酒造量を保っていたが、幕末、特に慶応2年

⁵⁹ なお、『株式会社山中兵右衛門商店260年史』（1980）、21頁では、小田原店の利益配分について「この店は実質上御殿場本店重役の事業で後々まで永くその利益を別勘定とし、分合によつて一部を店員の私徳としていたが、2代目安太郎のとき他店と共通勘定に改めた」と述べられている。

⁶⁰ 近江日野商人館所蔵。

⁶¹ 青柳周一は明治5年の小田原店の事例の他に、本店や伊豆店が損銀を出した場合、その弁銀支出が主法金から支出されていることを例に「主法制度の実施の過程では多額の繰越金が発生しているが、ここから各店の損金高の2割5分について弁銀を支出するという方法による本店・出店の損失補填も行われた」と指摘している（青柳周一（2006b）、117頁）。なお、文化10年から文政11年において㊥店や㊥店で損金が出た場合は、本家が弁銀を支出していた（賀川隆行（2005）、第10表「山中家日野本家の費用（主要項目）」）、42頁。

には米価高騰をうけて激減する。資金面に関しては、元手金は本店から融資されているが、株金の融資は受けていない。よって酒造株は本店の所有であることが推測できる。利息は本家に納められているが、為登金は他店舗、特に御殿場酒店と異なり、少なくとも嘉永期までは本家に上納されていない。これらのことから、本店の「附店」としての小田原店の位置づけが明らかになった。

本稿では以上の点を明らかにしたが、小田原店の「勘定細見帳」が中間決算、本決算の年二回決算を行うことで、経営の実際にどのような機能や効果をもたらしているのか、という点にまで踏み込むことはできなかった。また、山中家の発展、拡大には、御用商人としての側面のあったことが推察されるが、小田原藩に対し、具体的にどのような資金や物資の提供がなされていたのか、小田原店が果たした役割がどの程度のものであったかなど、解明するには至らなかった。出店経営の全貌を解明するという点では、残りの出店についても本稿と同様の分析が必要となる。その上で、本家、本店、出店の間の原料、商品、醸造品や元手金、株金、利息、益金などの資金をめぐる総合的な流れについて分析し、山中家全体の経営の内実を明らかにすることが今後の課題となる。

参考文献

〈主要史料〉

- 「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)
- 「御殿場酒店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)
- 「伊豆店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)
- 「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)
- 「店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)
- 「本家勘定目録控」(近江日野商人館所蔵)
- 「勘定目録」(近江日野商人館所蔵)
- 「田酒店要用控」(近江日野商人館所蔵)

〈稿本・私家版〉

- 稿本『山中兵右衛門商店二百五十年史』上・下 (1976)
- 私家版『株式会社山中兵右衛門商店260年史』 (1980)

〈刊行資料〉

- 石井良助・昭藤弘司編『幕府御触書集成』5 岩波書店 (1994)
- 石野瑛編『小田原及箱根史料』名著出版 (1932)
- 小田原市編『小田原市史』通史編近世 (1999)
- 御殿場市史編さん委員会編『御殿場市史』8 通史編上 (1981)
- 滋賀県日野町教育会編『近江日野町志』 (1930)
- 三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并為替日々相場帳』2 (1916)
- 三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』増補改訂 東京大学出版会 (1989)
- 南足柄市史編『南足柄市史』3 資料編近世(2) (1993)

〈研究文献〉

- 青柳周一 (2006a)「山中本家(日野)保管の近世文書の特徴について」『近世・近代における商業資本発達史の研究 - 近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究 -』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫, 課題番号:15330068)
- 青柳周一 (2006b)「山中兵右衛門家における文久家政改革 - とくに主法制度の導入について -」『近世・近代における商業資本発達史の研究 - 近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究 -』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫, 課題番号:15330068)

- 井上定幸（1963）『北関東における近江商人の醸造経営 ―上州藤岡町・原田四郎左エ門店の場合―（一）（二）』『郡大史学』9, 10
- 上村雅洋（2000）『近江商人の経営史』清文堂
- 上村雅洋（2004）「近江商人正野玄三家の奉公人と給金」『大阪大学経済学』54(3)
- 宇佐美英機研究代表（2003）「近世・近大商家文書に関する総合的研究」平成12年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（課題番号12410089）
- 宇佐美英機（2006a）「近江国日野商人の特徴」『近世・近代における商業資本発達史の研究 ―近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究―』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）
- 宇佐美英機（2006b）「近江日野商人山中兵右衛門家の奉公人請状」『近世・近代における商業資本発達史の研究 ―近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究―』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）
- 宇佐美英機（2007）「明治期山中兵右衛門家の奉公人請状」『彦根論叢』365
- 江頭恒治（1959）『近江商人』弘文堂
- 江頭恒治（1965）『近江商人中井家の研究』雄山閣
- 小倉栄一郎（1962）『江州中井家帖合の法』ミネルヴァ書房
- 賀川隆行（1997）「江戸下酒問屋小西屋の経営」『三井文庫論叢』31
- 賀川隆行（2002）「江戸畳表問屋西川甚五郎家の経営構造」『三井文庫論叢』36
- 賀川隆行（2005）「日野商人山中兵右衛門家の勘定目録（上）」『三井文庫論叢』39
- 賀川隆行（2006）「関東地方における日野商人」『近世・近代における商業資本発達史の研究 ―近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究―』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）
- 菅野和太郎（1941）『近江商人の研究』有斐閣
- 佐々木哲也（2003）「山中兵右衛門家文書（御殿場・小田原・沼津）目録の構成」御殿場市立図書館・日野商人山中兵右衛門家文書研究会『日野商人山中兵右衛門家文書目録』
- 佐々木哲也（2006）「日野商人山中兵右衛門家の出店概要と史料構成 ―商家・出店経営文書の現存状況とその特徴―」『近世・近代における商業資本発達史の研究 ―近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究―』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）
- 末永國紀（1997）「幕末維新时期山中兵右衛門家の支配人経営と家政改革」『近代近世商人経営史論』有斐閣
- 末永國紀（2003）「商人資本の蓄積過程 ―近江商人矢尾喜兵衛家の場合―」『経済学論叢』54(4)
- 鈴木直二（1977）『徳川時代の米穀配給組織』国書刊行会
- 谷本雅之（1990）「銚子醤油醸造業の経営動向」林玲子編『醤油醸造業史の研究』吉川弘文館
- 筒井正夫（2006）「御殿場地域における山中兵右衛門家の位置」『近世・近代における商業資本発達史の研究 ―近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究―』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）
- 日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館酢の里（1998）『中埜家文書にみる酢造りの歴

史と文化』1－5，中央公論社

曲田浩和（2002）「帳簿にみる中野又左衛門家の経営について－ 一九世紀前半を中心 に－」大野瑞男編『史料が語る日本の近世』吉川弘文館

松元宏（2006a）「日野商人山中兵右衛門商店の歴史」『近世・近代における商業資本発達史の研究－近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究－』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書（代表：筒井正夫，課題番号：15330068）

松元宏（2006b）「明治前期の御殿場 〆本店

「勘定細見帳」について」（日野商人山中兵右衛門家文書研究会『近江日野商人山中兵右衛門家の資料的研究』御殿場市立図書館

美馬祐造（1972）「河州小田原藩領の在払制度」『ヒストリア』60

宮本又郎（1988）『近世日本の市場経済』有斐閣

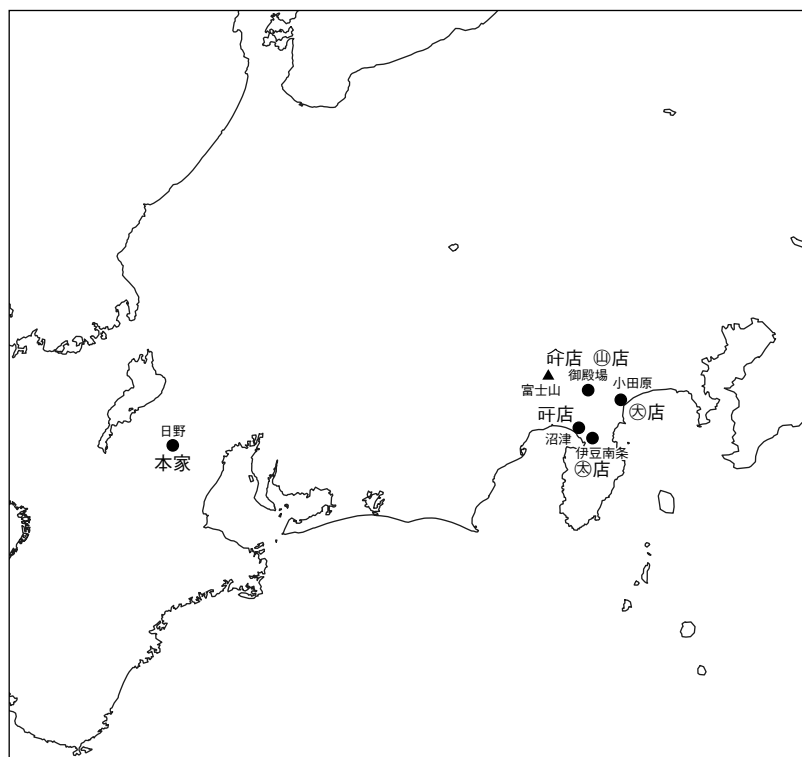
本村希代（2004）「近江商人正野玄三家の合業流通」『経済史学』39(3)

柚木重三（1940）『灘酒経済史研究』象山閣

柚木学（1975）『日本酒の歴史』雄山閣

柚木学（1987）『酒造りの歴史』雄山閣

参考地図



山中兵右衛門家の本家・本店・出店の配置

Business Activities of Omi-Hino Merchant, Yamanaka Hyouemon Family, 1833-1872: The Case of Odawara Branch

Atsuko Suzuki

Yamanaka Hyouemon family who was one of Omi-Hino Merchants established five branches in Gotenba area located at the foot of Mt. Fuji in Edo period. Focusing on the bookkeeping of Odawara branch, this paper examines the business activities of Yamanaka family.

- 1) The financial statements of Odawara branch were prepared twice in a year ; the half year results and the full year results. They were based upon a double entry bookkeeping system.
- 2) Analyzing of the profit and loss statements, this paper points out the aspects of production, purchase and sale.
 - The main business of Odawara branch was not only to brew sake and soy sauce, but also to sell rice.
 - High productivity of sake was stable between 1844-1859. However, it deteriorated in the end of Edo period because of the jump in rice price.
- 3) Focusing on the balance sheet, the relationship among Hino head office, Gotenba main branch and Odawara branch is clarified.
 - Hino head office loaned the start up capital to Odawara branch.
 - Hino head office earned the interest from Odawara branch.
 - Odawara branch paid the profit of current term to Gotenba main branch.